

考える主婦の投稿誌



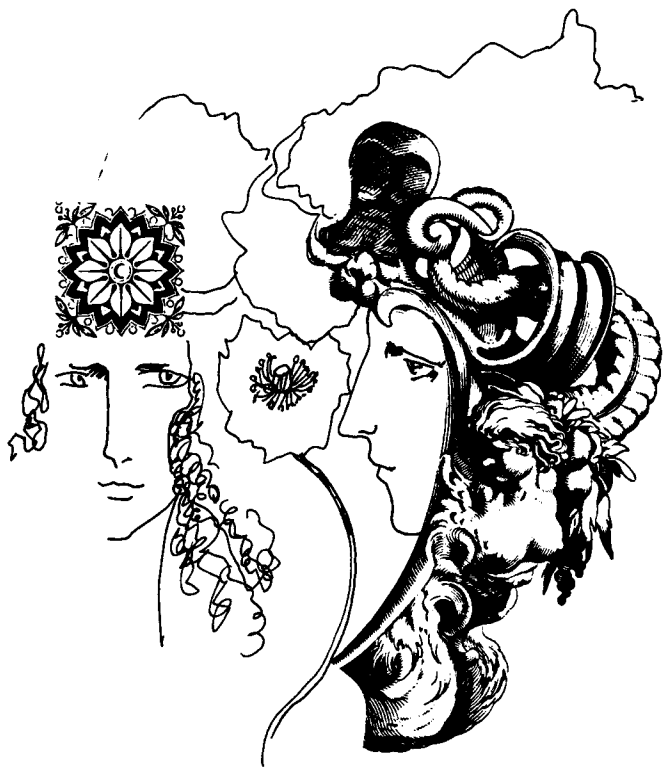
あいふ

146

特集

母性とは何か

書きたいひと
考えたいひと
知りたいひと
怒りたいひと
「わいふ」は
あなたの雑誌です
あなたの中にあるものを
声にしてみませんか？
あなたは 発見するでしょう
同じことを
考えていたひとが
あそこにも ここにも
いたことを
そして
みんなで考えるとき
あなたは もう
一人ぼっちではない
ということ





特集

「母性」とは何か

■日本人の母／萩原元昭	16
■特集投稿	21
鈴木みち子*中野桂子*亀山和枝*安岡厚子	
■座談会「母性迷信」	26
■子殺しと母性愛—良妻賢母には関係ないことか—／安達倭雅子	32
■母性愛さまざま—条件反射・ホルモン・学習　そして？—	36
■シリーズ「生きています」③／青柳祥子さん	2
■投稿随筆／たていと・よこいと	4
矢崎道子*細川伸子*森口昭子*阿部小枝*浅井俊子	
■主婦の長電話／四方愛子	8
■わいふティーチ・イン	11
原　真智子*井上桂子*中西淳子*北村七重*小林やすえ	
■女のからだを知ろう—スペキュラム体験記—／宮　淑子	38
■一妻多夫と一夫多妻の国／蜂谷　緑	42
■情報コーナー	45
■お能拝見②／和田好子	46
■おしゃべり	51

表　紙：橋本　治
マン　ガ：西田淑子
レイアウト：林　慶子



身の丈以上もある白木の機に座して、巧みに梭（シャトル）を操る青柳祥子さん。夫に留守居を申し渡し、単身スウェーデンに飛び立って織物を学び、つい最近帰国したばかりである。この話を聞く限りでは何やら現代版「夕鶴」を彷彿とさせてくれるのだが……。

青柳 祥子さん

複雑な構成図を前に、目下青柳さんは壁掛を製作中。素人目には、気が遠くなるばかりの細かい手と足の連結作業の繰返しである。それを彼女は、なんと謡曲を鼻歌代りに、気が乗れば一日何時間も続けてしまおうと言うのであるから、見上げた根気と労力の持ち主である。

ゴトン、ゴトンという音を家中に響かせながら機を織る彼女の後姿に、ついついこちらは勝手に、ロマンチックな「つう」のイメージをオーバー・ラップさせてしまう。

こう話したところ、「ガハハハ……、ワタシがつうみたいな手弱女に見える？」と、一笑に付されてしまった。加えて曰く、「ワタシは、あんなエキセントリックな女じゃない。ごくごくありふれた平凡な女だよ」と。

七年前、七つ年上のおつれあいと結婚する折、「オマエさんにはオマエさんの人生、ワタシにはワタシの人生がある。今後一切、お互いの領域に口出しすることとはまかりならん」と、断固、不可侵条約を締結した。

そして一緒になるが早いか、自立の道

の第一歩として、再就職の口を捜して奔走するが見つからず、それならと習い始めたのが、当時まだ走りであった「パンの花」である。

みるみる腕前は上達。一年足らずで注文が来るまでになった。しかし、年々名が売れ、仕事の量が増し、多忙になるにつれて、彼女は「パンの花」との付き合いにそろそろ疲れ始めている自分に気付いていた。

そんな日が続いた或る日、彼女は突如として「一目惚れ」をしてしまった。

スウェーデン織の代表的な織りである「フレイッシュ織」に遭遇したのである。あの手織り特有の風合には、誰だって魅了されてしまいそうだが、青柳さんの場合は「憑かれてしまった」と言った方がピッタリだったのであろう。

勿論、織りを習い始める。だが、やればやる程、本場の織りとのギャップに苛立つばかりであったと言う。

「ああ、スウェーデンに行きたい！日本でスウェーデン織を学んでも、第一、糸の色合からして違うんだから、どうしたって限界がある。糸の染めから本場でみっちり勉強したい」と、彼女が御亭主

に打明けた時、彼は『おばさんめ（なぜか彼は様子さんをこう呼ぶ）、ついに吐いたナ』と、内心思いつつも、かねての条約通り、一切ノーコメントで通したそうである。

何か大きな難関があると燃え出す性分は何処ぞの野球チームの監督のようだが、とにかく彼女はスウェーデン行きを自力で実現すべく燃え出したのである。その日から、形振り構わず資金作りに精出した。ここで皮肉にも「パンの花」は、その本当の威力を彼女のために發揮することになるのである。

三年が経過した。貯金はやつと目標額に達成。青柳祥子さん、二十九才の秋のことである。

「まるで近所にも行くみたいな顔をして、さっさと発って行った」（見送りに行ったお友達のお弁）彼女の、スウェーデンでの居住先は、最も歴史的手工芸が保存され且つ盛んだと言う「ダーラナ地方」の、とある田舎町。日本からの同好の士数人と宿舍を共にしながら、近隣の織物学校へ通う生活が始まる。

行つてすぐ、季節は長い冬に変わった。あの北欧独特の気の滅入るような冬の空ばかり眺めていたら、さぞホーム&ハズシックにかかったことだろうと尋ねると「冗談ポイポイ、そんな暇なかつたよ」と、言下にハネ返されてしまった。

一方、留守居を仰せ遣つた御亭主はと言えば、こちらも件の「与ひよう」とは違つて、朝は平常通り出勤し、夜はきちんと家事を片付け、筆不精の妻へせせと手紙を認め、少しも慌てず騒がず、独り心静かに妻の健康を毎日祈りつつ、恙なく約半年間を送つたそうである。

また来年、青柳さんはスウェーデンに行く予定である。ゆくゆくは織物作家として自立はしたい。しかし、それが目指す「生」への頂点では断じてないと言う。

物事をシヴィアーに観測する姿勢は、「今は子供はつくらない」と言う言葉によく顕示されている。彼女が平凡な女と云うのなら、平凡とはなんと素晴らしいことであろうか。この織物にかける情熱が、彼女自身にフィード・バックされた時こそ、正に彼女の行動力は、より一層の力強さを増すのであろう。（鈴木）

投稿 藤 筆

たていと
よこいと



はれもの

台東区

矢崎道子

春だから、というわけでも
あるまいが、ここ五日程前か
ら私の右肩の丁度真中辺に、
芽(?)が出て腫んで来まし
た。何日間にもかけて、じわ
じわ、と腫んでくるそのやり
きれなさは、首筋から胸にか
けて、そして右の二の腕の方
まで筋が張ったようにつっぱ
り、身体を二つに折って上半

身を下に下げようものなら、
ヒヤーと悲鳴を上げそうにな
る程重く痛い。しまいには頭
の芯まで痛くなり、大げさに
言えば、上半身不随といえる
程の有様になり、普段は威勢
のいい私もしんなりして声も
出せずにいるというのに、我
が亭主殿は知らん顔。そして
今夜も風呂上りにタコの吸い
出しを貼り変えようとして、
ガーゼに吸い出し薬をつける
べくつまようじを出して、「こ
れ、ちよっと持っていて」と
言ったら、亭主曰く、「これ
で、つつつくの」と言うので
す。

ああ、もう、うーんくやし

い、と思いつつ「人のことだ
と思つて、ずい分残酷なこと
を言うのネ」とにらみ返すと
「ああ、違うのか、俺は又、
膿が出ないから、つつつき出
すのかと思つた」だなんて。
彼はユーモアのつもりで言つ
たのでしようが、今、この時
それ程の余裕などないのです。
こんな人とあと何十年一緒に
いるのかなあ——と嘆いてみ
るのです。

でもこの亭主殿、誰から押
しつけられたわけでもなく、
言ってみれば、私がほれちゃ
ったのですから……。

今はもう腫れてはいますが、
ほれてはいないんです。でも
結婚して頂いた(そんなムー
ドだったのです)手前「もう、
ほれていません」じゃ申しわ
けないので、あと、どの位か
はわかりませんが、辛抱しな
ければならないのではないかと
考えています。

物資の功罪

京都市

細川伸子

この年頃になると、不思議
に物をよくもらうようになる。
若い頃の貧しい頃は、会社関
係等、差し上げる物が多く困
ったものだ。

ついつい、近所の若い人に
食べきれぬ物とか、上げるこ
との方が多い。京都という所
の土地柄か、人柄かはわから
ないけれど、もらい慣れをさ
せるという悪徳を生んだ感じ
がしないでもない。

例えば、留守中に荷物を預
つてもらおうとお礼を待つてい
るような気配で、こちららも気
分がよろしくない。

贈り物とは神の御心と解釈
して、おすそわけを共に歡ぶ
ものと今以て思っている私自

身、物というものは豊かになるほど、心は貧しくいくものであるとの実感が常日頃身にしむこの頃である。

吾が家の息子もカルピス、ウイスキーなど湧いて出てきてるように思っているように、いささか抵抗を感じるのは、貧しさから出発したとまどいなのだろうか。子供を年相応な贅沢さに慣れさせるといふものに恥じらうひとときもある。

身についたもろもろの悪癖をすべて払いのけたいような峻烈な寒さの立春である。

なま え

静岡市

森口昭子

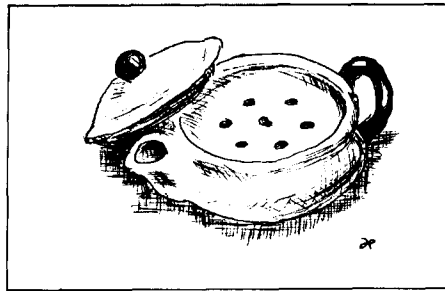
一四四号の「おしゃべり」に初原稿をのせていただきました。何の手違いか—おそらく、当方の文字の乱雑さが原

因でしよう—昭子ではなくて明子になっていました。などと書き出せば、これは怒って抗議をしているのだとお考えでしょうが、実はそうではなくて、ただある種の感慨にふけています。

森口昭子というのは、私の只今の戸籍上の名前です。結婚にあたって、当然のように夫の姓を名乗りました。無論心のすみに抵抗するものがありました。結婚というものを当時あまり真面目に考えていなかったし、又私は無名ながら、文筆生活を続けるつもりだったので、(ああ、恥かしい!)いわゆる「本名」など、どうでもよいと考えていたのです。雑文書きもしましたが、その「どうでもよい」仕事は、夫の姓にし、多少なりもわが作品という気のあるものには、旧姓名をつけました。(全く、ハズカシク、今、首まで—お酒のせいもあ

って—赤くなっている!)

「わいふ」は、今のところ森口昭子の方の名で参加しているわけですが、これはワイフという立場上当然そうなるのであって、何もこの参加を



「どうでもよい」と考えているわけではありません。念のため。

さて、このわが名を示す二組の四文字をつらつらながめてみるに、上の二文字は夫の

姓(又は、父親の姓)、子というの、あつてなきが如き符丁だから、私の実名は、昭の字一字に書尽きるらしいと、気がついたわけなのです。その、大切な一文字が、マチガッテいたので、あの「おしゃべり」を書いたのは、ひよっとしたら、私ではなかったらしい—という、又しても、恨みがましくきこえるでしょうが、さし当って、そうは思わないで下さい。告白すると、自分が影になつてしまったような、たよりないと同時に、実に自由な気分にもなつたのです。名前なんかなくて—つまり肩書きは無論のこと、もう形式的なものは何もなくなつて、ただ、ここに「われ」という実体がある……などと。

あとグラス一杯で、眠りこんでしまうというところまできているので、よい影の如き気分になつているのかもし

れません。眠りこむ前に、明日出席すべき、遠いおつきあいの人の結婚式の案内状を見ておかなくては——と、もうろうとした手を伸して、「影なるわれ」は愕然としました。

良家の坊ちゃんとお嬢様なるお二人は、挙式翌日「エーゲ海方面へ旅行」されるらしいのですが、何とお嬢様の方は姓だけでなく名も変えていらつしやるのです。京子さんが恵子さんに、単に姓名判断による改名かもしれませんが、あるいは、恵子さんになった京子さんは、自分から選んで新生活の為に、「影」になろうとなさつたのだらうか、と思つたわけなのです。それもひとつの自己主張として。それとも、やはり私には無縁の世界である日本の良家には、花嫁は白無垢の影となるべしという家訓でもあるのでしうか。

達ちゃんの 保育園拒否

三鷹市

阿部小枝

姉は東北の港町に住んでゐる。夫は定年退職して新たな仕事も決まり一年がすぎた。長男夫婦には二才半と零才の男子二人の子供がいてお嫁さんは中学の教師をしている。同じ屋根の下にこの六人が生活と共にしているのだが二人の子供は五十才を半ばすぎた姉が母親の留守中を預かつてきた。毎朝お嫁さんは「子供をよろしくおねがいします」と挨拶するといふ。姉にとつて上の子の達ちゃんは非常に動きの激しい子でひと時も目を離せない。次男の健ちゃん

気が重かつた。そこで若夫婦と相談のうえ達ちゃんを保育園に預けることにしたので入園一日目、達ちゃんは嬉しくありませんでした。お母さんの手から保母さんの腕に抱かれた途端にはげしく泣き出したのです。「心配いりません。始めはどの子も同じに泣きますがすぐに慣れる筈です。ですから早くお帰りください」保母さんにそう言われてお母さんは保育園を出ました。夕刻気になりながら引取りに行きますと保母さんたちはお母さんの迎えを待つていたように報告をしたのです。「おやつもお弁当も満足に食べないで泣きわめきいま口に入れた物を吐き、お昼寝の時間はとうとう別室でぐずり続けてひたすら泣いたんです……」疲れ切つたらしい保母さんの報告にお母さんは恐縮して、お詫びとお礼を言つたことでしょう。達ちゃんは顔面蒼白、

ぐつたりとして立たせようとしてもすぐにすわり込んでしまします。背中におぶつた達ちゃんは帰り道で「ポンポンがいたいヨ——」と言ひ出しました。玄関でおぶられた達ちゃんを見た時、ただごとではないと姉は思つたそうです。小児科の医師は往診にきて外科の医師にも診せる必要があると言ひ、明日あらためての来訪を約束して帰つて行つたので、家族はますます心配でしたが達ちゃんは温めた牛乳を二〇〇g飲み、吐くようすもなく眠つてくれました。翌日も達ちゃんは元気がありませぬ。お母さんは休暇をとりに、約束した医師二人が診察にきてくださいました。外科の先生は達ちゃんのお腹を何度となくおさえて診てから達ちゃんタツタしてアンヨでき……？」と尋ねました。じつと先生の診察を受けていた達ちゃんはゆつくりと布団の

上に立ち上ってから座敷を抜け廊下に出ると走って見せたのでした。

居合せた大人たちはあつげにとられそして大笑いになりました。笑いながら姉は己れの傲慢さを恥じたと言います。

孫三人を預つて

神戸市

浅井俊子

七十三才の寡婦。二男、二女の母。長男夫婦と同居。

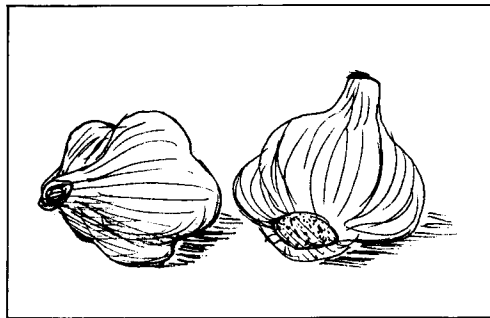
十一才を頭に三人の孫は主として私が育てて来た。直接、子供の面倒をみるのみではすまない。炊事、洗濯、掃除、その他、家事全般に追われながらの日々は、時に随分苦しかった。しかし苦しければこそ、孫が無事寝に就く夕べには何ともいいえぬ平安な喜びを感じる。戸外で、彼等が思

いがけず私を見つけた時、実に嬉しそうな顔をする。万事につけて信頼感の表明がある……。しかし一面、私は次の疑問にとらわれることもある。親より身近なものになつてしまつたら……と。

生来、私はあまり健康に恵まれず、疲れ易い上に、とかく息切れがする。その上、神経質で何をしててもむやみに念が入り、はかどりが悪く、朝七時前後から夜九時すぎまで休みなしに働いてもいつこうに能率が上らない。夏はもつと早く起床するのでそれほどでもないが……。

とにかくこんな自分にむち打つて、私は子供たちの夕食だけは早目にすませる様努力を重ねているけれど、大人の方までは中々そうは行かない。嫁にしても、勤務を終え、翌日の野菜、魚、肉等の買物をして帰つても、ひと休みしてすぐ夕食の箸を取れることは

減多にない。特に私は、ミンチ料理が性に合わず、とかく嫁に依存してしまふ。天ぶら等の揚げ物も以前は全部私がしていたのだけれど、近年、しばしば右手に持った物を落



とす様になり、熱い油を扱う途中に起り得る種々の危険を感じる。これでも完全に彼女に渡して、私は揚げ鍋に近づきたがる子供を制しながら彼等の相手をする役にまわる

ようになった。

幼稚園では雨が降れば送迎せねばならない規定になつている。昨年など二月三月は、梅雨どきにも劣らずよく降つた。強風に横なぐり土砂降り。の雨をふきつつけられて傘も利かず、肩から裾までズブぬれになる。動かずに待つのだから非常に寒い。やつと子供達が出て来ても、雨でめがねがぬれ、乏しい老人の視力では顔が見分けにくい。漸くさがし当てて近づこうとするがぬれた裾が足からこんで動きにくい。ころぶ。こんな時、よく手を貸して下さる方があつた。

幼稚園には、大掃除にも行く。油拭き、ガラス磨きなど自分としては一生けんめいに努力してするのだけれど、若い方の様にはできない。ここでかけながらお礼とおおびを申し上げる。

(カット・早乙女光子)

神谷 圭子)

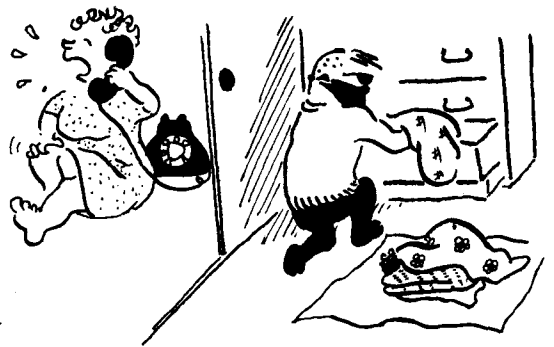
四月二日の毎日新聞家庭欄の記事によれば家庭内で電話を使用するのは主婦が群をぬいてトップであり、特に用事がなくとも電話をかける、平均しても一回八十分は話し二百五十分という例もあるなど、「女の長電話」はやはり事実だということである。

この報告は、二通りの解釈ができるだろう。一つは主婦は亭主の留守をいごと長々と電話をかけては金と時間の無駄使いをしている、ということ、もう一つは、主婦の楽しみというのはいせいで親兄弟や友人と、電話で近況報告やおしゃべりをする程度——住宅事情や交通費の値上がりなどでめつたに実家へも行けないことが多い——だということである。

もつとも、この記事を一読してまず前者の意見を持つ人が多いだろうということとは予想がつく。後者はそれに対する弁解という所であろう。長電話という言葉じたい、女性を連想させ、非難がましいひびきを持っている。ところで、男性でも用もないのにやたらあちこち電話をかけまくる人は結構いるらしく、「電話魔」などと言われヒンシュクを買ったりしている。しかし「電話魔」には、「主婦の

長電話

柳 四方愛子



長電話」に伴うだらしない、いかにも非難がましいイメージはない。この、何となくだらしない、それでいていじましいイメージは結局、主婦の使っている電話が自分の電話でなく、他人の——亭主も他人のうちなのだから——電話だということからきているのではないか。電話はかける、しかし電話代は自分では払わない、というけじめのなさが、非難がましいひびきとなって表われるのだろう。もし主婦が、自分のこづかいなりアルバイト代から電話代を払う、少くとも、基本料金は夫がもつてもダイヤル通話料は自分で払う、というようなことが一般に行なわれていれば、「主婦の長電話」は時々軽いからかいの種にはなつてもそれほど非難がましくは見られないかもしれない。

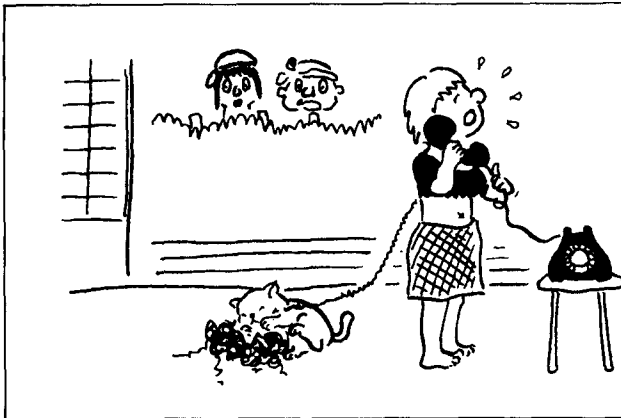
主婦が経済的に独立するということは、まだまだ非常にまれなことだと思われる。そういうことは大体において不可能で、無理にすれば家庭にむしろトラブルを持ちこむという声も強い。なぜだろうか。本当にそうだろうか。生活費の一切を、経済的に独立させるといふことは、新婚初期の共働き時代くらいを除けばまずで

きないだろうし、主婦が家庭の管理者としてなくてはならない存在である以上そこまでする必要もないであろう。でもだからといってすべてを夫のかせぎにおんぶしてしまうしか道はないのだろうか。経済的自立より、精神的自立の方が大切であると思うが、全く経済的自立のない所に精神的自立は生まれないのでないだろうか。

妻が自分自身の目的にお金を使う——その使い道を夫に知られたくない場合は特に——やり方としては、昔ながらの方法では、いわゆるへそくり——生活費から何とか浮かす——とか実家からこっそりもらってくる、などというのがあった。いずれもあまりかつこいいものではない。最近では、生活費とは別ワクで妻のこづかいというのを決め、美容院代、趣味、妻の友人との交際費などをそこから出すのが一般的になり、前述のやり方よりははるかに進歩だと思う。

しかしさらに望ましいのは、夫のかせぎから妻のこづかいをもらうのでなく、結婚前に妻が自分でかせいだ貯金を少しずつ使い、その間に、家事育児を犠牲にしないでこづかい程度はかせげる方法を

主婦の



何とか考え出すというようなことではないだろうか。

若いOL達は独身貴族の代表のように言われているが、彼女達はどのようにしてそんなに平気で金を使えるのだろうか。結婚資金にある程度使い、残りを、子供が大きくなって多少かせげるまでのこづかいにするための貯金にするとしたら、よほどケチケチして独身時代を過ごさなければならぬはずだ。若いのだからお金をかけないで楽しく過ごす方法はいくらでもある。こういう考え方は、女としては可愛くないのだろうか。多くのOLのように、結婚するまでは親がかり、結婚したら亭主がかり、と百パーセント移行させるつもりで無邪気に独身貴族を謳歌した方が男性にとっては感じがいいのだろうか。しかし、若いOLが仕事の内容の割には高い給料をもらうのは、結婚して幼い子供を育てる間の「失業手当」と考えれば筋が通るような気がするのだが。

このようなことをいろいろ考えるようになったのは、主婦がわずかでも「自身のお金」を持っているのといかないのとで、ずいぶん意識が違ってくるのではないかということに、自分が主婦になっ

てみて気がついたからである。この「わいふ」の購読にしているからが、もし私がOL時代のわずかな貯金の残りを持っていないとならざるはずがなかった。夫が反対するとか、金を出してくれないとかいうのでは全くない。ただ、毎日のおかず代や子供の下着を買った値段などと並べて「わいふ」購読料を家計簿に書くということが全く念頭に浮かぶはずがなかったということだ。もし自分のお金が全然なかったとしたら、私は「へえ、こんな雑誌があるのか」と思っただけで、自分が購読するなどということは夢にも思いつかずに忘れてしまったことだろう。

主婦が自分のお金を持たないために、自分のやりたいことをがまんしなければならぬというのはいまだいい。恐ろしいのは、自分の内にある何らかの欲求に気がつかないで通りすぎることを繰り返しているうちに、自分自身の欲求、意欲というものをまるで持たない人間になってしまうことである。そうなった主婦は、夫にとっても、子供にとっても魅力のない人間だということは、主婦という生き方の中にひそむ残酷な陥穽といった大げさだろうか。

主婦は家庭に閉じこもっているため視野が狭くなるということは、度々指摘される所であるが、こわいのは知識や情報量の少さよりも、ものの考え方にけじめがなくなってくるのではないだろうか。人のものと自分のもの、人の立場と自分の立場、などの見分けがなくなると、自分が正しいような錯覚におちいり、自分が太陽で亭主子供はまわりを回る惑星、その他はすべてはるかにかすむ大星雲、というような気分になってくるのだ。主婦業も五年目に入って私自身まさにそうなりつつあることに時々気がついて恐ろしくなる。そしてウーマンリブの主張の中にも、まさにこのような「主婦的発想」のあらわれているものが時々見受けられ、ため息の出ることもある。

今の主婦に比べ、昔の主婦は地位こそ低かったかもしれないが、生産にたずさわる者としてそれなりの尊敬を受けていた面も多かったのではないだろうか。むしろ、多岐にわたる手作り、寝具や衣服の製作などの生産技術は今の主婦の生活からは失われてしまった。社会全体が変わっている中で主婦の生活だけでもと戻すとい

うことはできない。主婦が純粹な消費者になつてしまい、「手作り」は趣味の段階にとどまらざるを得ないのも仕方ないことだろう。しかしそれならそれで、少しでも賢い消費者になること、また消費生活のすべてを夫に依存するのではなく、自分自身の消費くらいは自分で負担するように努力することが要求されるのではないだろうか。

主婦の小遣いかせぎというようなことは、女性の労働権確保の運動の中では無視されているか、むしろ運動の趣旨に反するものとして斥けられているようだが、私は少し違った考え方をしてみたいと思う。すべての女性が男性と全く同じように職場に進出することは、理想かもしれないが実現の可能性は乏しく、いくら保育所をたくさん作ってみてもどこかに無理が出てくるのではないだろうか。しかしすべての女性が、主婦になつても自分のこづかい位は何とかする力があるということとは、社会の底流を少し動かすことにはならないだろうか。そしてそれほど実現不可能でもないと思う。これだけでは女性解放は達成されないだろうが、とっかかりにはなると思うのである。



女の敵は女？

―スタイリリスト自殺に思う―

横浜市 井上 桂子

過日、東京のある女性スタイリリストが仕事と育児の板ばさみになって自殺した。幼い一人息子にあてて「お母さんは仕事が大好きでした。やさしくしてやれないでごめんなさい。」という意味の走り書きを遺していたという。

その数日後、某新聞の投書欄に三十代前半の主婦の方がその死を非難し、主婦は子供が成長するまでは家事育児に専念することが理想であり、女が職業に生きていく以上は独身で通すぐらいの厳しさが必要だという意味の意見を述べていた。

その考え方の根拠はどこにあるか知らないが、まさに女の敵は女、その意識の变革こそが女性解放、ひいては人間解放につながるのだという思いを強くした。

私には四歳になる双子の男の子があり、いわゆる専業主婦であるが、もし双子でなかったら子供を預けて職業を続けていたかも知れない。又、いずれ将来、きっと復職しようという望みをもっている。私はそれまで続けていた仕事が好きであり、ここにこそ自分の生きがいがあると思うし、又、男も女も人間は

皆、夫や子供のためではない、自分自身のためになすべき何かをもっており、自らのためにだけ生きる場所で十分に生きてこそ、真に自立した人間らしい自由な生き方ができると考えるからである。

これは何も家事や育児を軽視しているのではなく、全く別の次元に立っているのである。家事は生活上必要最低限のことで、すべてではない。育児は人生の一時期の過程であって、いずれも女が、或は男が自らの生のすべてをかけてなしとげるべき性質のものではない。それは、一時期であるから通りすがりに、何かのついでに、片手間に行つてよいということを意味しない。又、よしあしの議論を超えたところに思いもかけぬ素晴らしい豊かな輝きを発見して、その輝きによって母親自身が生かされるということもある。さしずめ私などそのくちで、子供がすばらしくて、とても他人になど預けるのはもつたいたないというのが真情である。

愛する夫とかわいい子供がいて、小さな住居があり明日のパンに心を労することもなく、主婦の座とはなんと、春の日の陽だまりのようにふんわりと居心地のよいものであろうとは、最近結婚して一児を得、長年の仕事をやめて専業主婦になった友人の言葉である。そして、それはそれでいいことではないか。ただ、それだけで全く十分であるのかと問うとき、私は一瞬、限らない退屈を感じてしまうのである。

この退屈とはすることがないという意味ではない。家の中がどんなに忙しくても、どんなに子供に手がかかっても、そんな

ことには関係ない、いわば形而上学的な退屈である。それに気づかないとしたら、それは又それでいいのかも知れぬ。しかし、気づかないことが、気づいて家庭から翹び立ち、自らのためだけの場所で生きている職業婦人の、或は職業ではなくても、そういう場所に生きようとしている女性の足をひっぱり、無言のうち自由な人間性へと至る道を閉ざす鉄の扉になっているとしたらどうだろう。先に述べた投書の意見はまさにそのようにしか私には感じられない。退屈さに気づかぬ人は、気づかないで退屈さの中にどつぷりとつかっているということはないだろうか。

最近、ある官舎に住む姉に会った際、近所の奥さん達の会話に時々、猥談が出るという話が出た。私の住む団地でも同じようなことがある。それがしばしば人間関係の潤滑油にすらなっている。結婚して五、六年たち、生きることに退屈してくと女は墮落するのね、と姉は言った。墮落——それは猥談に限らない。偏狭なものの見方、現状満足——目に見えぬ墮落が、一見幸福そうにみえる主婦の心を日々むしばんでいくとしたら。仕事と育児の板ばさみになって自殺した女性の死を、私は決して認めることはできないが、それ以上に非難することなどできはしない。現代の性的分業文化、および保育施設、環境、人材の貧困さの中において、職業と家庭と、そのどちらをも完璧になしとげようとするなら気が狂うか自殺するしかないといえれば極論にすぎるのであるか。



女にしかわからない 不都合さ

名古屋市 中西 淳子

先日はじめて子供を連れてある会合に出席した。子供が家にいる間は、そうした会合にしろ、御稽古事にしろ外に出ることはすべて諦めていたのだが、託児設備があるということなので出かけてみる気になった。

おかげで二時間、私は心おきなく話しを聞けたし、子供もまた、友達や保母の方と楽しく過したようである。帰り道、三才になる娘は「センチトオウタ、ウタッタノ」「オカアサンゴッコモシタノ」と、とても楽しそうに話してくれた。久し振りに外の空気に触れて、親子共々さわやかな気分になり、出先に託児設備があるということの有難さを改めて思い知った。

私が出かけた先は「勤労婦人センター」といい、勤労婦人福祉法（四十七年発布）に基づいて、昭和五〇年三月オープン、昼間働く婦人と家庭の主婦のために九時から夜の八時半迄、解放されている。

主な仕事は自主的なグループ活動のための部屋貸し（無料）、春と秋の年二回、三ヶ月間の講座を設けての講習会、各種相談

ごとの受付け、主婦の再就職のための情報提供など。センター内にはそのための部屋がいくつか設けられ、他に軽運動室（体力づくりの器具を設置、指導員が随時指導にあたる）、図書室、洋・和裁室、料理室、託児室などがある。

私が最も感激した託児室は広さ二〇㎡、日当りも良く、子供用トイレも付属、よく選り抜かれたオモチャや本、そして折柄ひな人形まで飾られているという細かい心配りに一目見て、これなら安心して子供を頼めるし、子供もきつと喜ぶに違いないと思つた。保母二人と児童福祉員一人が開館中（九時〜八時半迄）託児に当たっているとのこと。

ところで先日、ある雑誌で女性の建築家による一文を読み、大変興味深く思つた。

「女の手で女の生活空間を」と題して、例えば職場に於ては、託児所（育児と仕事の板ばさみを解除）、休憩室（生理休暇の問題の解決策として）の設置や女性用トイレの改善（各人の生理用品保管の引出しや棚の設置）。一般家庭に於ては、壁と対面した冷たいステンレスの流し台ではなく（主婦は楽しい来客時も一人背を向けて、もてなしの仕度や後かたづけに汗を流している）、広く明るいダイニングにカウンタースタイルに張り出したキッチン（そこでは夫や子供たち、または来客と言葉を交わし、手を貸し合いながら誰もが作る側に参加できる）、さらにベビーカーをひいてゆつくりと買物ができるデパートや独身女性のためのコミュニティ・マンション（？）など、今まで切り捨てられてきた女の側の建築物、施設の実現を計らなくて

は、そのために大勢の女が連帯し、女の手で計画し、構造や設備を考え、さらに掘り起こし、コンクリートを打ち、屋根をふき……：そこまでやれるようになったら、それこそ女の文化を女の手に取り戻せるだろうと述べていた。

女にしかわからない不便さ、不都合さは、女が主張し、その改善を要求していかなくては、と同時に、女の手で解決できるだけの実力も養わなければ、と考えさせられた。



主婦の身分証明

目黒区 北村 七重

私は、今、東京の目黒区に住んでいます。近くに区立の図書館があつて、所定の手続をとりますと、一度に二冊まで、二週間の館外貸出しをしてくれますので、それを利用して本を読んでいます。以前は、川崎市多摩区に住んでいましたが、そこでも、区立多摩図書館というのがあつて、目黒区同様、館外貸出しの制度がありました。

どちらの図書館も、館内閲覧は誰でも出来ませんが、館外貸出しをしてもらうためには、その地区の住人であることが条件です。何か住所の証明になるものを、最初に提示しなくてはならないのです。

私は、家にいるだけの主婦です。身分証明書は持つておりません。

それで、多摩在住当時、米穀通帳というものがありませんから、それを持つて図書館へ行きました。ところが、通帳では、北村某とその妻一人が、たしかに川崎市多摩区に住んでいることはわかるのですが、妻が北村七重であるとは書いてないのです。それでも、なんとか了承してもらいましたが、中途半端な気持ちでした。

目黒区に移ってきましたら、今度は米穀通帳はくれませんでした。そのかわり、移ってから、私は国民年金に加入していただきましたので、図書館で住所の証明をと言われた時は、その年金手帳を持つて行きました。これは、すんなり許可になりました。

もし、年金に入っていなかったら、主人（サラリーマン）の健康保険証でも、持つて行かねばならぬところでしょうか。皆様は、こんな時、何を提出なさいますか。

中年いろはがるた

桐生市 小林やすえ

いろいろな手を出し子づれで勉強会
ろ論ずるよりやるが勝ちだと行動派
は母親と同じことをくり返し
ほほえみも子育て終って影うすれ
へへイ・マンボと若い気出せば子が笑い
ととうとう時代おくれと子に言われ
ちチリで死なぬと掃除をさぼり
り理屈言う子に体験教え
ぬぬくぬくぬるま湯生活おおいやだ
るルビー、サファイヤ関係なし
を夫をしつけるつもりがしつけられ
はわが三十代に悔いはなし
かかあさんだつてやるわよと
奮起だけは一人前
よよつてたかつて生きがい論
たたかが十円の違いに足を運び
れ礼儀正しくと教えられない生活態度
そそんな得とる女の一生

つねに自己をみがこう自分のために
ねねりえと甘えりや亭主気味悪げ
な何度もくり返しよいしつけ
むムチ打つて体力鍛えるなわとび挑戦
う鶯の声までいかずとも発声訓練
ののどもとすぎた感じの婦人年
おおつとどつこい腰痛の始まり
くくやしいけれど一生女
ややっぱり母親になれて幸せだ
ままだまだ人生の半分じやないか
けケーキを食わずに美容体操
ここどものためだと家事をさせ
え遠慮しないで何でも発言恥かこう
て亭主の顔色うかがい職捜し
あありあ四十才かと白髪ぬき
さ札たばもつてみたいと給料日
ききょう一日の健康に感謝する
ゆ勇氣を出して自己改革
めめいめいが自分のことは自分でやり
み皆が自分のために生きりや公害なし
し死と生は裏表
ももう一度若くなりたやと鏡をみ
せ整理・整頓で一年暮れる
すスーツもワンピースも流行おくれ

特集

母性とは何か

母の名において、すべてが求められ、母の名において、すべてが許された。母ほど讃えられたものも、母ほど虐げられたものもない…

日本人の母

萩原 元昭

日本の兵士が戦死するとき、「天皇陛下万歳」と唱えて死ぬ、などというのは真赤な嘘で、大抵は「お母さん」と云って死んだと云われています。また戦没者の手記には、外国のものよりはるかに多く、母親が登場してきません。

またはマスコミで、例えばある力士が優勝すると、母親の写真が出たり、「母親のためにがんばった」などと

いう談話が掲載されたりする。

人間の原初的な体験として母親の持つ意味が大きいということは、洋の東西を問わずたしかな事実ですが、しかし日本人が母に与える価値には、なにか特殊なものがある。母とはまるで宗教のように、心の奥底深くあって、心の支えとなり、行動の指針となり、魂の救済となり、時には励まされる「何ものか」なのです。

そうした母のありかた、とらえかたを肯定する立場、否定する立場、いろいろありますけれども、それよりもまず現代の日本で、どうしてこういった母親のイメージが出てきたのかを考えてみたいと思います。

(一)

母、といわれて日本人の頭にまず浮かぶのは、一般的にはやはり、「厳父慈母」のイメージでしょう。

家族制度に基づいて家庭が成立していた戦前の日本では、父親が家長として外敵から家族を守る反面、家族に対しては、命令一下、服従を要求する——これが「厳父」です。一方、母親は、家庭の中で生活面の雑用を受けもち、ことに子どもに対しては、こまごまとした世話をやくことによつて、「慈母」というやさしさの面が強調される。

ことに明治以来、敗戦までは、いつも家族のために身を粉にして働き、とくに子どもに対してはすべてを犠牲にしてつくすのが母である、とされてきました。

昭和二七年から四〇年まで、毎日放送が中心になつて

制作した『母を語る』という番組があります。各界の著名人によつて四五〇名以上の母が語られているわけですが、その内容を分析してみると、「慈母」の観念がどのように形成されているかがわかつて、たいへん興味深いのです。

まず最初に出てくることは、母が苦勞している、という観念です。実に64%がこのことに言及しています。

「朝から晩まで働いていた母」

「母は黙つて座っているだけで、その苦しみが体になじみ出ていた気がする」

働く母に加えて、さらに耐える母、つくす母の姿が浮かんできます。

「たえず口小言を云つていた父の顔色をうかがい、忍従にあげくれたおふくろ」

「父に女ができたが、母はじつとこらえていた」

「自分のことはかまわず……まわりの人がうまくやつていけるように自分を捧げた人」

こうした母の姿は、もちろん家族制度の中の女性のありかたと無縁のものではありません。女性には妻として、母として生きるほか、生きる道がなかったのですから。そして伝統的に子どもを生む道具とみなされ、ことによつてこそその地位を安定させることができた女性、老後の生活を子どもに保護してもらうより他にすべのなかつた女性にとつて、子どもが唯一の生き甲斐となることは不思議ではありません。

「母は子どものためにだけに生きてきた人だと思えます」
「ただ子どものために生きてきてくれた母は、ありがたくて神さまのようだ……」

この母はまた、父の意志に逆ってさえ、子どもの望みをかなえてくれる母でもあります。ある野球評論家の母は、夫が野球が大嫌いなを知っているながら、子どもに特別高価なグローブを買ってやる。

「私の一生はこの母のプレゼントによって開かれたと云っても過言でない」と彼は云っています。

このように、母は子どもの成長と幸福を生き甲斐として、あらゆる苦勞をいとわず子どもにつくす。子どもを産んで育てることがたやすいことではないことは、日本に限ったことではありませんが、しかし、耐える、つくすという形で、母についてとくにそのことが語られ、常識化されているところに、日本の特殊性があったのです。こどもはこうした母を、どのように受けとめているか。

子に愛着する母、子を生甲斐とする母は、こどもの側から見れば、甘えられる母であり、心の支えとしての母に他なりません。

昭和三十四年から八年間つづいたTBSのドラマ番組、「おかあさん」に対するモニターや視聴者の反応の分析によると、こうした母と子との相互依存の関係は、ほとんどの場合肯定的にとらえられています。これに反し、戸塚文子の「ドライ・ママ」をモデルにして描かれた母

親に対する評価を見ると、子からの独立、子の独立を意識的に実行しようとする母は、むしろ否定的な評価を受けている。

こうした傾向がさらに昂ずると、妻に対しても、母の役割と同じものを期待する夫、依存と甘えの関係から脱けられず「母としての妻」を求める夫まで出現してきます。昭和の初期に出版されて五百数十版を重ねた鶴見祐輔の「母」における妻などは、その典型的なものです。

けれども母がどんなに子を愛し、慈しんでも、子がどんなに母に甘えても、子の人生は所詮母の人生と同じものではあり得ません。しかし母の犠牲の大きさを知っている子は、自分の生存に母の人生の意味が賭けられている、という重圧から逃れることができず、そこから生じてくる母に対する日本人の特殊な感情——その最大のものが「罪の意識」です。苦勞した母、自分のためだけに生きた母に対してはどんな孝行をしても報いることができず、という後めたさ——子どもが自分自身の人生を生きるといふ当然の行為が、即ち母に対する裏切りに通じるような後めたさ——それが「罪の意識」なのです。

現代最高の知性と目される小林秀雄氏の場合さえ、母に対する罪の意識がうかがわれることを見ても、いかにわが国においてこの意識が文化的に根深いものであるかが感じられます。

(二)

しかしこうした母のイメージは戦後、家族制度の廃止、核家族の増加とともに大きく変化してきました。

ただし変化したとはいえないものの、以前の日本の母としての特徴がすっかりなくなつたわけではありません。

第一の特徴は、あい変らず母親と子の密着度が非常に高いということです。こどもがつねに母親にまつわりついでいる。母親も、こどもをつねに自分の手の届くところにおきたがる。こどもべつたりの保護なんです。

私がイギリスに留学していたとき感心したのは、イギリスの母親が意識的にこどもの自立能力をのばそうとしている態度でした。二才のこどもがジャングル・ジムのてっぺんへのぼろうとする。見ていて私は思わず、「危い！」と叫んだんですね。これは日本の母親の態度です。ところがその子の母親が、「アリスは危いことはしませぬ。大丈夫」と云う。

この母親は毎日、その子を自動車にのせて、子ども用の遊び場へ連れていって遊ばせていたんです。その中で、自立能力を意識的に発達させようとしている。日本の母親のこどもべつたりの保護と、そこが違います。

第二に、母親の役割意識の肥大化という点、これは戦前からほとんど変化してないと云えます。

女性が一人の人間として自分を規定するのではなく、まず母親という役割で自己を規定する。他の人もその人を誰々ちゃんのお母さん、というところえかたをする。

戦前の日本の、伝統的な家父長制度では、家族の各部分が独立の個性を持つことがむづかしかつた。個性によ

る意志決定はほとんど不可能で、家族内の地位——たとえば父、母、祖父、長男など——によって、それぞれの役割が決定しているわけです。これは一応地位志向家族と呼ばれています。この性質は濃厚に現代の核家族の中にも残っています。ことに子どもの誕生によって、それまでは不安定であつた妻の座が、いつそう安定した永続的なものになることは、いったん母になると、子どもからばかりでなく、夫からも、他の家族の構成員からも、「お母さん」「ママ」などとよばれる事実によって、はつきり表わされています。

(三)

一方、戦後の核家族の母親に、それまでの母親と大きく違う点も出てきていることも、見逃せない事実です。

それまでの母親は、こどものために尽くすけれども、それは何くれとなく身のまわりの世話をやく、あるいはこどもがしたいと思つていことをはげまし、援助してやる、という形で行なわれています。私なども今でも郷里へ帰ると、母が、ほれ寒くなつた、下着をもう一枚着ないと、というふうに世話をやいてくれる。

東大紛争のとき、キャラメルママというのが出現しました。たべもの、衣服を含めた身のまわりの世話で愛情を示すのがかつての日本の母の特徴でもあり、限界でもあることを、あの事件は象徴的に示しています。こどもの将来に関する選択を行なうことは、母親の領分ではなく、ある階層、ある家庭に生まれたこどもの将来とい

うものは、母親の意志とはまったく無関係に社会的に決定されてきました。こどもの将来の生活のルールを、母親の手で敷いてやろうなどということは、第一出来もしなかつたし、関心もなかつた。ひたすらこどもを慈しみ、はぐくみ、尽くす、というのが日本の母だったのです。

しかし一方、もし我が子が、社会の圧力に抗してもはつきりした志望を持ち、それを貫こうとした時は、家長たる父親の意志に逆つても、子どもを助けてやる。こうした母に対して、子どもが無限の甘えとなつかしさを感ずるのは当然かも知れません。

しかし現在の母親はちがいます。母親自身がこどもの未来のためにルールをしいてやらなければならぬ。教育ママという言葉で嘲笑的に語られますが、選択の可能性のなかつた昔の母親と、現在の母親とはそこが違うのです。

一方では、役割意識がまだ強く残存し、母と子の依存関係もつよい。しかしこどものためのルールは母親がしく。敷かなくてはならない、と思ひこむ。また実際、家族制度がなくなり、産業社会の中で分業が徹底して個人が確立して行くとともに、家族全体が荷つていた責任を、親個人で背負こまなくてはならなくなっています。

しかし、日本の家族の中では、とくにサラリーマン家庭では、父親不在の傾向がよく、母と子の密着度がたかい。母親が子どもの世話をし、将来のためにルールを敷こうとし、すべてを準備して一方的にこどもに与えようとする。その結果、こどもの無気力化、情緒的未成熟、

困難に対処する力の欠乏など、いまやさまざまな問題が生じています。

現代の母親がそこから脱け出すためには、子どもべつたりの伝統的な母のスタイルをふりすてて、自分自身のを確立するために、より社会に目を向け、社会的に生きる必要があると思われまふ。

おのれを空しくしてこどもに尽くした昔日の母の姿が、こどもの目にどれほどなつかしいものに映ろうとも、その母が、人間として、女性として、本当に充実した幸福な生活を送っていたかどうか。

歴史の歯車を逆にまわす必要もなければ、まわすこともできないのです。

しかし現代の「母」の、望ましい子ばなれのためには、家族の他の重要な成員の一人である「父」の支持が必要です。「母」が変わるためには、「父」がそれを支援し、「父」自身も、家族との相互関係の中で変化していかなければならぬでしょう。

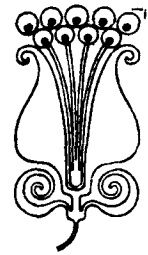
《子を生きた甲斐とする母》のパターンがなくなり、母が自らの人生を生きたことを身をもって子に示すようになったとき、《罪の意識としての母》も子の心の中から姿を消し、日本の親子関係は大きく変化するでしょう。その時には日本人そのものの精神構造、ひいては日本の文化の質も変ってくるに違いありません。

(群馬大学助教授・社会学・談)

(参考文献 日本人の母・山村賢明)

(まとも・田中)

自分のために 私は産まない



世田谷区 鈴木 みち子

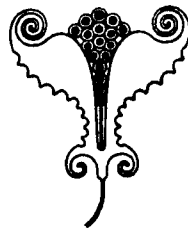
自分のために私は産まない。

というたびに、人にいちいち説明をするわけ。大方の人は、夫婦がいれば子が出来て当然と思っているから色々心配してくれるよね。「それは大まちがいよ」とか、「ね！ どうしてえ？」とか。そのたびにべつちやんこの私のお腹の中をさぐりに来るの。私がちよいと食べすぎてお腹出っばらしてると、わざと「ちよつと！ おめでたなの？」って聞くの。私の答「いいえ、うんこがつまってるの」おもしろくておそろしいのは、「子供産まないと老廃物がたまっちゃって子宮筋腫になるんです。こわいわねえ」って。お産で女の体の毒が全部出ると信じている人がいるのですよ。どっちがこわいんだか。ダンナ様に悪いわよ。とか、老後のことをいう人が多いのですよ。あなたはきつと淋しい老後を送るのねって、予言者みたいな事をいう人もいる。子供におこづかいもらって三波春夫を観にいくのが楽しい不安のない老後だと思っている人々が案外多いのね。友人の中で「あんた子供もいないのに何いうの」っていう人がいるの。その人一応子供がいるんだけど、おやつは百円ラー

メン、夜はアメリカ風出店のハンバーガーとかっていう具合で、お母さんの愛にうえていうのかどことなく雑な子供達なのよね。お母様も流行に先がけての、キッチン・ドリンカーなのね。夜ごはんも子供も放り出してどこかの家に行つてキヤーキヤーやつてるの。そういう人でも私みたいなのを目の前にすると、子供子供っていうのよね。私から見れば産みっ放しという感じなの。私の方がある意味では、育児に責任を持つている様に思うの。ぼっかりあいた心のあなをうめるためとか、姑さんにせつつかれたとか、自分以外の人の気持にゆれ動かされて、子供をつくるという事は、一番無責任なことだと思ふのよね。これからの世の中は、これではいけない、出産というものを母性で考えるのではなくて理性で考えるべきだと考えるの。又、男の側も当然、父性について考える事になるわけ。私が産まないという事については主夫とよく話し合ったのね。初めから子供を育てたりするのに結婚したのではないので意見は同じだったけれど、二人して一生使つてやりたい事があるから、時間もお金も、きれいに使っちゃうの（主夫は、山師でも一発屋でもないのよ）。もし天変地異があつて、出産して育てるとしても、子供の方に二人共気持が動かないだろうし、夫婦の気持の中に子供が入りこもうと思つても、入る余地がないと思うから、きつと気持の片寄つた、出来そこないの人間にしてしまうような気がするの。そうになると、一家総出のかわいそう大会になつちまうと思ふの。又、これから先の世の中に対して、ものすごく不安なのね。わけのわからない世の中で子供を育てて、そんな世の中に

送り出された子供こそかわいそうだと思う。それなら、二人で思うように生活した方が、各々の人生のかてになるに決まっているから。他人から見れば、非常に消極的な人生かもしれないけれど、むしろ、自分自身のための人生をあざやかカラーにしたいのよね。最後に世の中の人にお願ひ。子供のいない夫婦にわざわざ「お子さんは？」って聞くのはやめにしましょうよ。ね。

母親Ⅱ育児Ⅱ母性 なのだろうか



大津市 中野 桂子

すったもんだの揚句の果て、高・中生の男の子たちを連れて妻と別居した男性が私の職場にいる。彼は男世帯二ヶ月経たないまへせいせいした」と以前よりずっと元気になり、夜勤の時には午前中家中を整頓し、子供たちの夕食を卓上にととのえるなど全く共働き女性と同じ家事労働をしながら生き生きと仕事の能率をあげている。これは最近の話だが、もうひとり、十年以上も前から矢張二人の男の子を育てている、これも「生き別れ」の男性がいる。そして双方とも子供たちが母親を求めることはないという。

次は女性の話であるが、独身時代から男性との交遊が多く三十才近くになって結婚したけれど、新婚旅行で「頼りな

い男」と即座に自分の方から「手切れ金」を払って離婚。婚前から親しかつた「妻子ある男性」とよりをもどし、はた目に余るものだったが、離婚十ヶ月後に周囲のすすめる人と再婚。再婚後も妻子ある男性とは切れず、妊娠して産休に入るまで両天秤を続けた人がいる。「大したもの」であったけれど、産休あけに出勤した途端、みごとな変身ぶり「ヘカアちゃん」になり切ってしまった。安心した人やら、がっかりした人やら……。

かつて、「全国婦人会議」の片隅に座を占めさせてもらった時、「子供から離れて、働きに出かける女性なんてよほど冷たい人間です」と、ある女性が云った。それなら私は「冷たい人間」ということになるなと思ったけれど。

では私は——私は独身でいたかった。「へわいふ誌」でのどなたかの発言のように、妹を三才下にもつ長女として生家にいる諸般のわずらわしさから逃れるため終始したと思う。次に、子供はつくらぬと決めて五年経った。六年目に「へつくるう」と決めて長女を出産した。それは仕事のなかで（社会教育関係）「体験が一番強い」ということが理念化してきたからであった。ところが「母親になる」体験はしたけれど、文部省のお先棒かつぎの「家庭教育補助金学級」を二五持たされて右往左往しているうち、「へひとりっ子」問題につき当り七年あいて次女を出産することになったのだ。満三才になった。そして子供とともに過した十数年をふりかえると、母乳をふくませていた時点（長女のみ）では母子のきずなを感じたけれど、やがてそれは「ヘナニワ節」だと考えるようになって、早く中学生ぐらいになって同じ

背丈でつきあいたいとか思わなくなつた。あるとき次女に「私の小さい時のお話して」と云われてギョツとした。記憶に残っていることが殆んどないのだつた。

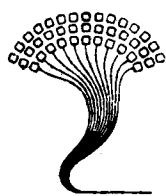
さて「母親⇨育児⇨母性」なのだろうか。それは大いなる錯覚なのだと思ふ。男性社会環境の必然性から生じた「追いつめられたもの」の錯覚だと私は思う。そして、それは、子供を生んだ女の最後のかくれみのになつていと思う。「母性」なる美名(?)のもとに、子供にしか抛らざるを得ない存在が合法化されているのだと思ふ。先にあげた女性が変身したのは、母親になつた途端に「なさざるを得ない子供の身の廻りの世話」という雑用にふり廻され、自分を見失っているからだと思う。それが「母性は女性のもの」とはめ込まれるのだつたら、何とも口惜しい話だと思ふ。

「冷たい人間」。私は自分をそんな風に考えたことはない。「あんたが居なかつたら、この職場はもつて行かへん」は、御世辞であるとしても、管理職との仕事上の対話の矢面に立つ構えをもつた「御母さんたのみます」的存在が、「冷たい人間」とは結びつかないと思ふ。

接する時間が少なくて、十数年或いは十年経た子供たちとの関係のなかで、子供たちから「家に居た方がいい」という言葉を正面からきいたことはないし「お母さんみたいに仕事をしたい」と、大なり小なりに云う娘たちに私は「冷たい母親」であるとも思わない。さきに私がギョツとした次女の質問(私の小さい時のお話)に対して「お母さんは御仕事をしてきたから、あまり覚えてないんだけど」と返事

をした時、次女は「へひどいお母さんだ」とは云わなかつた。即座に「いいよ、私も大きくなつたら市民会館(私の職場)でお仕事するの」と云つたものだ。女性の作家や芸術家が、子育てよりも自己陶汰に打込む、その情熱を、「子供を離れて云々」などというのはあてがいぶちの「子育て」しか眼前に持てない人の、あてがいぶちの云い分だと思ふ。いまここに、「生き方」を「人生の理想」を同じくするもの同志が集つて、それぞれの人間が自分を生かして働きながら集団生活をする共同体があるとするなら(すでにある親子ぐるみの芸術家集団のように)そこでは、人間の拠りどころとしての母性というものが、男女に関わりなく自然に生じてくるであらうと思ふ。それがほんとうの「母性」ではなからうか。母親⇨育児⇨母性とは、男性社会の女性差別の産物にすぎないと思ふ。

「育児」の 日々を想う



目黒区 龜山 和枝

「女の子ですか！有難うございます」私は自分の弾んだ声を聞いていた。昨年の秋、分娩台の上でのこと。

四年と十ヶ月程前に長男が生まれた時は唯ポーツとしていたものだ。妊娠を知つてから育児書を読み、ベビー用品

を選び、*「寡困気づくり」*に精を出して来たのに、赤ん坊の存在が一時の事件のようにしか受けとれずいたものだ。退院の時に来て、姿こそ母らしく赤ん坊を抱き話しかけていても、こんな*「モノ」*持って帰って……と四方さんの論にもあるように、母になってしまった現実にはうろたえていた。幼かった日、母が「生き物を飼うのはまっぴら」とベットの嫌ったことを思い出したりして。その時から、育児書を地図に未知の世界への旅が始まった。その地図さえ信頼し難い漠とした状態に区切りをつける道標は、健康診断であった。四ヶ月もすると、*「モノ」*は赤ちゃんに育ってくる。子育て三年、と言われることに力を得——*「団塊の世代」*、この類の辛抱には慣れている——それなりに楽しみながら、子どもに係わってきた。居直りついでに年子でもいい兄弟をと願った。一般的に子どもが欲しいと思うことはなかった。長男も四才に近くなると恵まれないのなら一人っ子でもよし、と思いを定めていたので、今回の長女は拾い物をしたような期待の一方で、「また、あの日々を」と腕を捲らんばかりに緊張していたのだが。産湯を使つたばかりの赤ん坊に、思いは溢れ、戸惑うばかりであった。

そこに*「不安定な生きモノ」*はいなかった。*「この子」*のことは知っている。知っていると素晴らしいことだ。キザを承知で言えば、愛することだから。そして、共に歩んで来た長男が一層いとおしく思われた。後日、「今回はオヤジになったと思つたな——」と夫が言った。そう、夫も私も、長男を育てることで、親になったのだ。

人が生きることは、己れの凡てを実現することとも言え

る。女が、あるがままその凡てを実現しようとするなら、*「母になる」*ことも一つとしてある。が、大きな一つではあっても最大最高のものではなく、それ以外の欲求を充たそうとするのは自然である。男がそうでないように、女も生殖器が目鼻の生きものではないからだ。だが長男を胎内に抱えた私を*「世間」*は、「こども? 男に身をやつとしておいで、皆そうしているのさ」と嗤つた。私は、生来のナマケモノの生地を出し、自主休業と己をごまかして尻尾をまいた。育児は、母性の発見であり、子と共に生きることは双刃の刃を振っている如く自身が問われもする。そして、何よりも井上さんの論にある様に「ただそこに在るだけ」である。これは男が見ようとしただけで父性にとつても同様であろう。が、女が一步そこに踏み込むと、母性としての生きよ、と言う袋小路であることが少なくない。胎内ではぐくみ、身二つになったように、母と子の距離を長くしてゆくことが、育児であり、母性愛であるのだ。この現実が育児をやりきれないものにし、少し意欲のある女に母になることを躊躇させている。

女の権利を言う時「女である前に人間でありたい」と言うが、この言葉の罪深さを知って欲しい。無意識に*「家庭Ⅱ女」* *「仕事Ⅱ人間」*と対立させ、*「男Ⅱ人間」*の発想を導いていることになる。母性を言い募り母や主婦でない女を差別すると同様で、主婦や母である女を差別し貶めていくことにもなる。女は人間ではないのか。男でも女でもない人間を知らない。*「人間」*とは*「男」*か*「女」*であることなのだと覚えていたい。

男女平等が分業の固定化にすり替えられつつあり、「平等さ」と子どもだましにアメ玉しゃぶらせ、「だからお家へお帰り」と女に母性しか見ようとしない反面、「女子ども」と一まとめにする母子の癒着が言われる。併し、子どもをかこむ状況―保育所、遊び場の不足、教育の荒廃、環境汚染、食糧問題、障害や難病児の問題等―考えると、誰でも暗澹たる思いに、ならざるを得ない。子どもは母の私有物ではない、という言のなんと虚しいことか。根本的解決ではない事もエゴとの批難も承知で、「トニカク」と母がその全身で守ってや々と育っている子どもでもあるのだ。母性を都合できりきざみ拡大し、そこに子どもを追いやろうとする力に、自身の為だけではなく子どもの為に怒りを覚える。どんな子どももその生を充足させ得るようにしてゆくことも、女が母性としてのみではなく、「へ女」として巾広く生きてゆける道へつづいているのだと考えている。

母親以外の 何かを



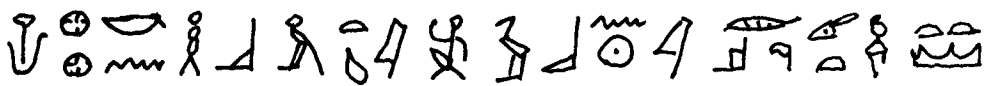
杉並区

安岡 厚子

現在三才八ヶ月と、一才六ヶ月の二人の子供をかかえて、朝から晩まで忙しくしております。育児に自分が向いているかどうかということ、考えている間がないほど、次から次へと雑用が出て来ます。ところが、子供が一人の時と現在を考えてみると、仕事の量が多くなっているのと反比例して、精神面では、ゆとりがあるみたいなのです。つい最近読んだ新聞に、「働くようになって初めて、余暇のありがたさを感じ、勉強するようになった」というような内容の文章がありました。現在の私の心境はこれとよく似ていて、母親として忙しくしている中で初めて、母親以外の自分の存在を自覚し、自分の時間をみつめて、何かを求めようとしているのです。子供の昼寝の時、夜子供が眠ってしまったから主人が帰宅するまでの間が、今は私にとって、とても有意義に過せる時、自分だけの時間なのです。主人が早く帰った日や、昼間の疲れが残ってしまった日は、テレビを見たりしてボーと過す時も勿論あります。

それと家の中ばかりにしていると、精神的にけじめがつかないので、表面的なけじめとして、必ずお化粧したり、少しの外出でも靴にはきかえたり、主人との対話も、なるべく子供抜きにしてもつようにしています。これも私の精神衛生上とてもよいようです。専業主婦という枠内ではあるけれど、母性以外の何かを求めようと、出来る範囲で、子供の成長に合わせてやりたいと思っています。

蛇足かもしれませんが、先日、主人の友人を混えて話している時、男性も自分の時間を持ちたいと願っていることがわかり、少々認識をあらたにしているところですよ。



座談会

母性迷信

こどもを生めば誰でもえらい母
親になれるのだろうか？



- A：一男一女の母
- B：一女一男の母
- C：一男の母
- D：一男の母、八月出産予定

子育ては本能か

A 女が母親になればこどもを育てる能力があるのが当然と思われているけれど、そんなことは迷信じゃないか、と思うのね。動物だったらまったくの本能ですむけれど、人間の子育てはそんなものじゃない。私の経験でもそうだったもの。

まず生まれたとたん、お乳がのませられない。第一うまく抱けないのね。赤ん坊がまた乱暴な子で歯のない口で乳首にかみつくの。痛くていたくて、お乳を飲ませるのがいやでね、あれが親子ゲンカのはじまり。(笑)

B お乳が出ないのは母親がわるいように云われるでしょ。でも体質的な遺伝だつてあると思うの。

A 私の母の場合をきくと乳母がいた。ということとは昔だつて乳の出ない女はいたということですよ。今は母乳礼讃で昔の女の人はみなお乳が出たようなことを云われるけれど、ものの本を読むと、昔は最初の一週間は乳親が来て飲ませてくれるのね。その間母親は産褥で寝ている。今そんなこと病院ではやってくれません

よ。

B 一週間なんか待てないから、さつとミルクを飲ませちゃうことになるのね。能率本位のやりかただから。

A 大体保健婦さんと看護婦さんとは、全部こども本位の考えかたでしょう。こどものために何でもやってやるのが母親だと思っている。母親に過大な要求をしてきて、できないのは悪い母親だといわんばかりなのね。

C こどもを生んだとたん母親としてしか扱われなくなる、という感じはたしかにありますね。

A それはすごく感じた。自分がひどくつまらないものになり下がった感じだね。自分が自分として認められないような：

C いや、それがとても嬉しい人もあると思うの、母親として認められるということが……。

B そこで始めて自分自身の存在価値を感じる人も大勢いるんじゃないの。

D 私の友人はわりあい独身の人が多いの。彼女たちと話していると感じるんだけれど、私はともかく今、この子の母親だという確固とした感じがあるの。彼女たちにはそれが無い。今死んでも、誰も

そんなに彼女らが必要としない淋しさというか、不在感というか、それがつきまとっていると思う……。

A でもそれは幻想よ。こどもが小さいときは、たしかに愛してくれる人が必要だし、何でもお母さん、お母さんなんだけれど、一寸大きくなってきたらどうかしら。母親なんか、ハナもひっかけないというのがこどもじゃないかな。自身自身のこと考えたって、よく分ると思うけれど……(笑)

D 母性とは何か、ということはこの間考えてみたんですね。そうしたら子どもを必要としている母親、というものが母性ではないか、と思ったの。「岸壁の母」

じゃないけれど、こどものほうは二十年、三十年経つたら母親を忘れてしまうでしょう。母親はそうじゃない……。

A でもね、ある時期までいっしょに暮してきた親しいものがいなくなってしまうという欠落感はあるんだな、こどもが巣立つときの母親の淋しさは当然のものじゃないかしら……。

C でも、日本の場合、女がこどもを必要とする、ということはそういうことと一寸違うのね。母親がこどもの存在によ

って支えられているのよ。それがなくなつた時には生き甲斐喪失になってしまうのね。自分のすべてを子どもにかけているからね。

A こどもがそういう親に報いようとする、今度はこどもが親の犠牲になると、今度は何かがあるわね。年をとった親の面倒をみるために、結婚しないでいる娘とか……いやだなア。

C 結婚した子は親から離れるのが当然じゃない。

A そうなんだけど、現在の社会状況ではこどもの中誰か一人が犠牲になつて親を見ざるを得ない、っていうことがあるでしょう。

C ある年令までは娘を結婚させようと思つて懸命になつてた親が、自分が年とつてくると、反つてこどもを手許に置きたがるということはよくあるわね。

A だから、母性愛と云つても、本当に利害を離れたものばかりかな、と思うのね。そのへんよく区別してかからないと。

子育てがすべてか

A こどもを生む前に、松田道雄氏の「私

は赤ちゃん」を読んだんだけど、あれを読んだために猛烈毒されたと思うの。今でも腹が立ってたまらない。

C またどうして？

A というのはね、あそこに出てくるお母さんというのが、子どもを育てることに何の抵抗も感じていないからなの。子どもが可愛い、という以外に何にも感じていなくて、自分が子どもを育てるために負わなければならない犠牲とか矛盾とかを一切感じていないのよ。あれを読んだために、子どもを生むことって、こんなことか、という程度の認識しか持たなくて……やっぱり男の人の書いた本ね。

生んでみたら、大違いだね、私にとつて子どもを生んだということは、悪いことだらけだったの。まず収入が一文もなくなつた。行きたい所へは一切行けないし、やりたいことも全然出来なくなつた。子どもを生んだとたん、こんなにも悪いことばかりあるのに、世でこれほど母性が讚美されているというのはサギにあつたような気持だったわね。

B 私は最初の子はちつとも可愛くなかつたわ。緊張しきつていて。

A 私も可愛くなかつた。

D 二番目の子のほうが可愛いっていいますね。

B それはほんと。

A 最初の子のときは、夜泣きがひどくて、こっちは不眠症になるしノイローゼ一步手前だったわね。二番目の子のときは、それがなかつたの。というのは、断乎として添寝をしたから。

B 私たちの時代が一番わるかつたんじゃないかしら。授乳は何時間おき、煮沸消毒、泣いても抱いちゃいけない、と原則ずつくめで……あの頃のアメリカ式育児法にふりまわされていたものね。

A 人間の子育ては動物と違って学習なしには行かないのに、育児書に書いてある通りにしようとする、到底実行不可能なことが書いてあるでしょう。教えてくれる人は誰一人ないし、助けてくれる人も誰もいない。

B 私も子育ての最中は本当に辛かつたわ。まわりの女はそれを当然としてるのに、辛いと思う自分はよっぽどエゴイステイクな人間なのかと思つたりして……

口先の礼讃ばかりで、実際には一寸も保護されていないのが母性なんじゃないかしら。礼讃に歎かれてはいけなと思

うの。

A 私は欺されなかつたわね。

B 大多数は欺されるのよ。しかも自分がそれを信じこんじやつて、その上にあぐらをかくようになっていく……。

C でも目に見える損失があんまりなくなつてくると、だんだん欺されなくなつてくるんですよ。ソ連みたいに女が外で働いている国はやはり子どもというの大きな負担でしょう。だからすくく一人っ子が多いのよね。もし子どもを生むことが女の本質的な生きがいなら、どんな状況でも女は子供を生み続けると思うわ。

昔のほうが無責任？

A 大体何かというと母性喪失だとか、

昔の母親はすくく母性的だったように云われてるけれど、今みたいに子どもに関する責任を母親がたった一人でひき受けている時代はなかつたんですよ。育児は母親のものというより、共同体の中で行なわれていたのだから。共同保育っていう形よね。村落が解体しちやつて核家

族になり、親が何の助けもなく子どもを育てることになってしまった。こんな形は明治以降でしょう。

B ことに戦後、核家族がふえてからよね。

A 昔の母親のほうが責任感がなかったんじゃないのかしら。周囲がよってたかって育ててしまっただから。

例えばキモノの背中に背守りというのが縫いつけてある。水に落ちたら神さまがそこをつかんで引き上げてくれるというわけ。川へはまって死んだら、こりゃ

丁度そのとき神さまが離れていたんだ——ということでも母親の責任にはならない。

B 今だったら全部、母親がわるいということになるわね。たしかに自分のエゴのために小さい生命を蔑ろにしているというのではないわね、だけど周囲の状況全部を度外視していつも母親だけが責められるということがありすぎると思うの。

D 大体安心して遊ばせる場所がないですものね。

C 子殺しにしても、非常に無責任なのもあるということとはたしかだと思うの。だけどそういうのは母性喪失とかいう問題より以前に、人間としての無責任さが母親になった時に現われたのではないか

しら。母親として無責任な人間は事務員になっても、店員になっても無責任なんだと思う。

A 昔だって間引きがあつた。生まれて七日の間はまだ冥界のものだという考えなんですよ。川に放りこむとか、口に灰をつめて俵の中に入れてとか、そんなことが残酷とも何とも思われていなかったのね。

C 食えないから殺しちゃうの？

A それは根底にあるけど、やはり人口抑制という一種の社会通念があつて、沢山子どもを生むと、世間に対してぐあいがわるかつたんでしょね。

D 母性も社会的に作られるということですね。

C 明治以後だって、今よりはずっと無責任だったと思うわ。私の母の時代なんかでも、子どもを祖母に預けたり、自分の姉妹に預けたりなんていうことはわりには平気だったし……今みたいに何から何まで母親が一人で皆負いこんでいる時代はないでしょう？

A 少なくとも母親がこれほど孤独だった時代は史上かつてなかったということを知っておかないとね……。

根強い母性信仰

C 男の人ってよくこんなことを云うでしょう、「母親になるとどんな女でも偉くなる」とか、「あの女はすばらしい女だが残念ながら子どもがいらない」とか：これは別に陰謀でなくて、本気で信じているという感じなんだけど。

A マクベスにもあるけど、「女の腰から生まれなかつた男」はいないものね。

C 一種のノスタルジアなのかしら。

A まあ人世いろいろあるけれど、何て

いつでも母親は子どもを裏切らないもの。

C 子どもに何かいいことがあつたとき、

心から喜んでくれるのは母親でしょうね。

A 私の父つていうのは、ものすごく母親を慕っていたの。つまりとても甘やかされていたのね。何でも云うことをきいてくれた。つまり自分の我儘をすべて許してくれたつていう人だったのね。

それは子どもにとつて、こういう母親はなつかしい存在だと思うわよ。世の中に出たらそういう人は他にはいないんだから……。

C だけどそういう男が夫になったらどんな夫になるかな。調べてみたら面白いんじゃないかしら。

A 絶対、いい夫にならない。私の父もひどい夫だったわよ。(笑)

いつも不思議に思うのは、母親が子育てについて何の展望も持っていないということなのね。つまり子どもに何から何までしてやって、ただただ大事にする。社会に出て行ったらそんなことではすまないわけでしょう？

C どうせ苦労するのなら、自分だけは大仕事にしてやるう、と思うんじゃないの。

A いいえ、逆よ。家の中で甘やかされていた人間が放り出されたら、本当に困るのよ。私とそのいい例なの。一人っ子ですごく甘やかされていて。十一の時母が亡くなって、そのためにどれだけ苦労したか分らない。まるつきり、生活能力がついていなくてね。

B 展望っていうものがはき違えられていて、よい学校に入れて一流会社へ——というために何もかもお膳立てしてやるというのが多いわね。

D いや展望なんていえるものでなく、せいぜい隣り近所へのみえみたいなもの

じゃないかしら、世間の路線、マスコミ路線程度のものなのね。私の母の場合なか、完全にそうでしたよ。

生むことの価値

B 二人子どもを生んで、何年かしてから三人目を生むひとがいるでしょう。あれは何時まで現役の母でいたいという気持なのかしら。

D こどもを生んで育てておけば、何をしなくとも、これだけはやった、という充実感があるものね。

B それは私、一つのエゴイズムだと思うわ。

C いいや、そうばかりではないのよ、人間というものはそれほど淋しいものなのよ。ともかく何かを創り出したい、という気持ね。それは必ずしもエゴイズムばかりとは云えないと思う。男にはその手段がないから、何とかして自分の存在を証明しなくちゃならないでしょう。だから戦争なんかするんだと思う。こどもを生むことは別に価値でも何でもないけれど、ともかく一人の生命を創り出した、ということとは事実だもの。

A まあ創造力の一種であることはたしかでしょうね。

B いいえ、生むだけが何が創造よ！

D だって無から有を生ずるでしょ。

A 生理的な力みみたいなものですよ。

B 自分自身の能力じゃないわよ。

A 女であるから、ということに過ぎない。女というセックスの持つてる価値よ。男はそれによって女を評価せざるを得ないということはある。ただそれが何か一つの陰謀と結びついて、女を持ちあげながら、実は粗末に扱っているという結果になっているんだと思うわね。

B 女は生むときは何も気がつかないで生んでしまう……これからは自分の選択で、生む生まないは自分で決める、ということが大切だと思うのね。

C “わいふ”の投書にも時々、自分は生まない、という人があるけれど、ああいうの読むとつくづくえらいなア—と思う。私なんか、生む前におよそ何も考えていなかった。

B 主體的に生きるために、生まないということね。

A 三人も四人も生む人は、毒食わば皿まで、という感じがしない？(笑)

D 居直りっていう感じがするわね。どうせ大したことは出来ないんだから、一人より三人の方が価値が多くなるんじゃないか、っていう……(笑)

C 子育てはやはり一番充実した仕事だつて云う人があるけれど、それは他に本当に好きなことがない、っていうことじゃないのかな。

母性とはなにか

C こどもを生んで、今まで分らなかつたことがわかつた、と思うことない？

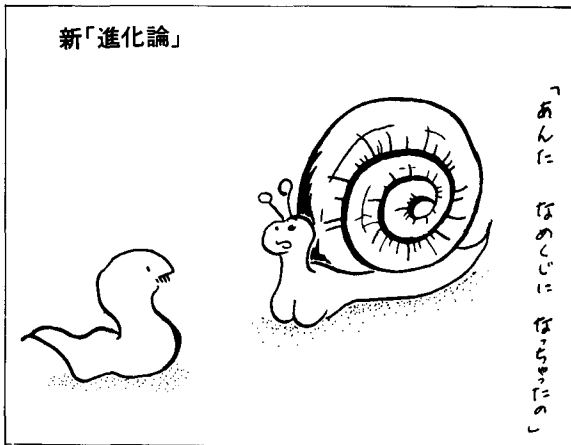
D 分つた、というよりも、自分が変わった、とは思いましたね。私は自分のことしか考えない人間だったの。誰のためにも死ねない人間だったの、亭主のためにも、親のためにも。今はこの子のためなら死ねると思う。

B いや、それはあなたが今子育ての最中だからじゃないのかな。今は保護しなければならぬ年齢でしょう。完全にこつちが責任を持って。私だつて子どもが小さいときはそうでしたよ。殺すも生かすも、まったく自分の責任だもの。恐ろしかったですよ、本当に。

自分の手に、有無を云わせずそういう生命が預けられてしまった、という怖ろしさね。自分がやらなきゃ、どうしようもないのなもの。

C 私はね、生む前はこどもに関心がないどころか、うるさくて子供なんて大嫌いだつたけど、生んでからはこどもの可愛さというのが分つた気がするわね。よその子も可愛い。こどもに注ぐ集中力はやはり女のほうがあるんじゃないかしら。

「あなた、ほのぼのにほらなさい」



B いや、それも社会的に作られたものじゃないの。

D それにそういうことは、他の場合だつてあるでしょう。犬を飼えばよその犬にも興味を持つようになるじゃないの……(爆笑) それと同じことだと思つて。

A 私はやはり女のほうがかどもを愛する本能は強いような気がする。

C しかし、この間こどものない友人がね、『こどもがないから親の気持は分らない、と云つちやいけな。私には親の気持はわかるんだ』と云つたのよ。その時私は実に差別的に、やはり分らないわよ、と云つたの。なぜかという、彼女は親というものをいいものだと思つている。ところがね、私に云わせれば親なんてまったく愚かなものなのよ。その上親になってみて始めて分る自分自身の残酷さだとか、身勝手さだとか、そんなものを子どものない人が本当に体験的に感じているかと云つたら、やっぱり感じてないと思つたのね。まあ親になることの最大の価値は、自分がいかに愚かな人間であるかを悟るといふことでしょうね。

(まとめ・田中)



子殺しと母性愛

——良妻賢母には関係ないことか——

安達 倭雅子

子殺しが起こる——たとえそれが事実どんなに深く長い苦悩の過程を経ての結果であろうとも、大抵の場合表面化された現象面は異常と云える。首を絞めたとか、熱湯をかけたとか、とても普通の感覚では理解できないと私達は考える。

「母親のくせして子を殺すなんて、全くどうかしている。気が狂ったか、さもなくばまるで鬼だ。私はこの人とは違う、私は気狂いでも鬼でもない、だから決して子を殺したりしない。子殺しと私は何も関係がない。それはどこか遠くの話だ」——私達はそう考える。そう考えて通過してしまいたいのだ。

子殺しが起こる——私達は大抵の場合、それを新聞やテレビで知る。新聞には紙面の量に、テレビには時間に、厳しい制限がある。だから新聞やテレビには報道の正確さ速さの外に、センセーショナルな魅力や、省略や整理や、手取り早く尤もらしい説明もある。この問題に限ったことではないが、特に複雑に屈折しながら迷路を辿る子殺しは簡単にはとらえにくい。私達はこうした事情の

マスコミによってしか、子殺し問題を知らされていない。子殺しが起こる——要因と見做されるものがあまりにも日常的で些細に見える場合や、なぜ殺したかが、他人からはおろか本人にさえも、後から考えて判然としない場合など、私達周囲は不安になる。突飛ばしたら打ち所が悪くて死んでしまった事件など、私にも、頬をひっぱいたいたら、よけようとした長女がドアのノブで鼻柱を打ち鼻血を出した経験があるからぞつとする。心神耗弱の状態で子を殺したなどと言うニュースは、どうもその方面に確固たる自信のない私は落着けない。つまり私達の「私はこの人とは絶対違う」と言う確信が少し揺らぎそうになるのだ。すると私達は「発作的に、育児ノイローゼで、衝動的に」などのマスコミの不明瞭な用語にすがりつき、現実から目を離そうとする。一部評論家の言う「子殺しは異常な鬼の母性喪失」の図式はその脈絡のなさと、母性喪失などと言う論拠不明の、その判った様を判らない様などところを何よりの頼りに、それを大急ぎで鵜呑みにする。こうして、マスコミと私達は明らかに迎

合競合しながら、「子殺しは母性喪失による」の迷信を創作したと言える。

Aさんは生後三ヶ月の赤ちゃんを焼却用のドラム缶で焼死させてしまった。新聞はAさんを特殊な精神障害者として報じたが、しかし事件の背後にある「狭いアパート、子どもの泣き声をうるさいと叱る夫、産後の精神不安定、孤独な密室化された育児」など悪条件と呼ばれるすべては、特殊でもなければ、他人ごとでもない。

私達は大半が狭い住居に住んでいる。私の今の住居に限って言っても、家の中で赤ん坊が泣いても、その声は家中隈なく響き渡る、声の聞こえない所など一ヶ所だつてない。眠るどころではない。かつて私の亭主も赤ん坊の泣き声を喜びはしなかった。亭主は「ナカセルナヨ」だなんて「赤ん坊は赤ん坊の勝手に泣いてるんです。別に私が泣かせているわけじゃない。」と口答えの一つもしたくなる様なことを言わなかったわけではない。産後の精神不安定も、生理的現象であれば、私にも一人前にあつたはずだ。私の子育ても孤独であつたと言わなければならぬ。不慣れの上に手替りがなかったから、私は二十四時間子どもを前にして馬鹿らしく緊張していた。本当に眠かった。一晩でいいから、子どものことを忘れて、のうのうと眠りたいと何度思ったことか。今にして思えば、私は不健康な程にそれに飢渴していた。Aさんは夫の安眠のために、赤ん坊を抱き放して自分は過度の睡眠不足だった。抱いている自分の子が重く、そ

のうち石の様だと感じたと言う。子殺しに對する私達の激しい忌避の願望に比べて、Aさんと私達は似過ぎてはいないか。私はAさんと私の状況の中に決定的な違いを発見できない。私達はAさんとほとんど同じ環境の中で子を育てている。とすると、私達は多かれ少なかれ、同じ様な子殺しの要因の中にいる。

子殺しが起こる——異常なのはその現象面だけで、その要因が私達に共通のものである以上、子殺しは人ごとではないことを、私達自身が確認することからはじめなければ、私達は依然として迷路の中をさまよひ続けるだろう。自分のことなのだから、自分で考えなければ、外の人は代つて考えてくれはしない。

Bさんは七才の息子を絞殺した。息子は癲癇てんかんであつた。そのためにか知恵遅れであつた。散々の病院通いの果てに、小学校の授業参観で、息子の知恵遅れが予想以上であつたことを目の当りに見て、これでは生きるには、ふびんだと考へたと言う。自分の子が他人に劣るのをふびんだと考へるのが、私は母親と言うものだと思う。母親とは子の苦惱を同苦とも言うべき厳密さで共感し得る、又はしていると思ひ込める。Bさんの「この子はいつそ死んだ方が幸せなのだ。」と手を下したその手は、それが誤りであろうがなからうが、母親の愛の所産である。親だからこそ過つたのだとも言える。私は子殺しが母親の子への愛の本質の中でも遂行されていく事実を見逃すまいと思う。そこに私は「母性喪失」や「子どもの私物視」などと言う考え方だけでは攻め切れないこの問題の本当

の恐ろしさと難しさと考える。

私は特に女に、母性愛と言うものが、まるで顔に目鼻の様な必然で、生まれながらに付着しているとは考えない。親と子の間の愛情は、やはり対象を得て後、接触の集積の中で確かになっていくものだと考える。しかし人間の「愛」と言われるものの本性は、考えて見れば、もともとひどく自分勝手で、ひとりよがり、厚顔で僭越なものだと思ふし「私がいなければ、この子は育たない。この子には絶対必要なのだ」と言ふ思い込みの押しつけで、母親は普通、いろいろな困難を乗り切りながら、立派に子育ての営みを持統する。人間とはそうしたものだとは私には考える。しかし、母親の子に対する心情が所詮「愛」と呼ばれるものである限り、愛の当然の半面である憎悪も残酷さも一揃は持ち合わせているものと覚悟しなければなるまい。

始末の悪いことに、それは愛の善意からの思い込みや思い上りや、美しい誤解や誤認を落差に、加速しながら表裏入れ替って行く。愛だからこそ、「私がいなければ、この子は育たない」と言ふ論理は「私が殺さなければ」にすり替って行く。つまり私に極言させれば、母性愛とは、うかうかしていると、人殺しをするものなのだ。そうでなくても「愛」とはもともと、あやふやなものなのに、世に母性愛ほど美しいものはないとおだてられれば、いや増しに落差は増大するものだ。この際、女も「私、母性愛が強くて」などと、品を作っている場合などではない。男も又、「オレ、母性愛の強い女にはホント弱

いんだ」などと、しどけなく涎をたらしている場合ではないのである。私は子殺しの問題を考えている間に、稚拙にその小道を低迷している中で、母性愛と呼ぶべきそれには、「子を育てる母性愛」と「子を殺す母性愛」があるのだとさえ考える様になった。母の子に対する愛情は子のためによいと判断する環境の下では、非常に積極的に子を育むが、しかし一旦、「これでは子は幸せに生きられない」と思い込みさえすれば、同じ母性愛と呼ばれるものに根ざすそれが堂々と悲劇を巻き起こす。私達は自分が母親でありながら、これについて何も知らなさ過ぎる。考えなさ過ぎる。

本来、子育ては楽なものではない。しかし人間にとつては不可欠なものである。又、権力にとつては、いつの時代でも労働力の確保のために重要な意味を持つ。その子育ての作業を社会的にも文化的にも一番低いところで安上がりに、母と言ふ女に結び付けておくために、母性愛は故意に不当に讃えられ過ぎて来たものではあるまいか。こんな私達は全く恥ずかしいことだが「裸の王様」によく似ている。本質の一面をもぎとられた「母性愛」の美衣など、もともとどこにもないのに、裸の私達はその柄を誉められてうっとりとしている。

子殺しと母性愛の係わりにおいて、私達が自分で考えなければならぬことは、母性を喪失したとか、しなかつたとかの問題ではなく、子を育てると言ふ私達の状況は、これで充分なのかと言ふ問題と、その半面にだけ光を浴びることを許され、不当な讃えられ方をして、

異形の信仰対象に墜落している母の子に対する愛情の定義を今後どう方向づけて行くのかの二つなのではないかと、私は考える。

問題をBさんの中に見て行こう。——Bさんは母親の愛の属性のままに、「子は生きるにはふびんである」と考えてしまったと書いたが、その生き得るか否かの場とは、母性と言われているものの内部のことではない。私は母性愛は子を殺すこともあると言ったが、Bさんは息子を嫌ったわけでも、天に代わって淘汰しようなどと不遜なことを考えたわけでもない。Bさんはこの現実の日本の社会機構の中に息子の生きる場がないと判断したのだ。今とほんの少し違う場がありさえすればBさんの息子は生きられたとは言えないか。息子は知恵遅れでふびんではあるけれど、生きなければならぬのだと言う客観性を、Bさんに与え得なかつた日本の現実社会の、私達はその共有者であることは忘れてはならない。つまり私達は内容的に同じ天を仰ぎ、同じ雨に濡れている。

Bさんは、働き者であつた。農繁期には農業を、農閑期には縫製の女工となつて働いた。その上、家事一切をこなし、姑に仕え、教育熱心で、夜なべには夫のワイシャツまで手作りにしたと言う。Bさんは臨月まで泥田につかつて働いていた、その重労働から病弱な子を産んだと、後に医者には法廷に証言したが、Bさんはそれを自分の罪として一人で耐え、愚痴一つ言わなかつた。担当の弁護士はBさんに逢いに行く私に「Bさんはおとなしい日本的な女ですよ」と、はからずもそう言ったが、彼女

のありかたが、日本で長い間尊ばれて来た、いわゆる良妻賢母像ではないかと気付いた時、私達はがく然とした。

思えば良妻賢母とは誰かのために良い妻であり、誰かのために賢い母であることを、女のよい生き方とするものだが、それは同時に、誰かのためにでもない不可侵の自我の不在を意味する。江戸期、良妻賢母とは、「三従の教え」に耐える女を呼んだ。主家のために息子に死を選ばせ得る母のことをそう呼んだ。明治から敗戦まで「産めよ殖やせよの母」や「靖国の母」や「特攻隊の母」のことを、良妻賢母と言いはしなかつたか。良妻賢母は権力の要請のまま、権力に向つて体を開き、産み殖やし、その子を中国大陸の黄土に埋め、南海の藻屑にしてはばからなかつた。この無定見に何かに従い耐えることを良妻賢母と呼ぶのなら、良妻賢母とは人間のことでない、主体不在の良妻賢母像の下には子殺しの歴史こそあれ、子を生かす道は開けては行かないと言う発見は本当に私を驚かせた。げに良妻賢母程恐ろしいものはないと思ひ知つた。

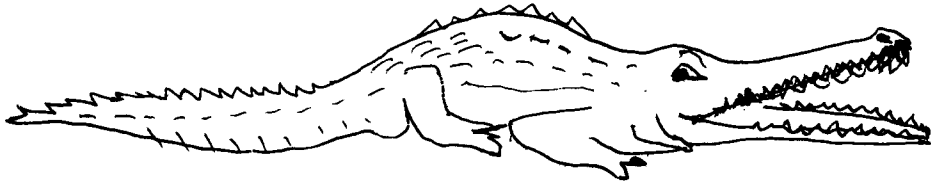
私は子殺しをしたくない。私の娘にも子殺しをさせたくない。そのためには、「みつともない」と謗られても、「子殺し、子殺し」と呼ばわろう。恐れずに自分の問題として、子殺しの本質を見据えようと思う。たとえばそれが母である私の、従来のもそれらしい伝説を失墜させるものであろうと、自分自身の本来性の回復のためなら、それが一体何だと言うのだ。

(子殺しを考える会メンバー)

—カット早乙女光子—

母性愛さまざま

——中川志郎さんにきく——



すべての動物に母性愛があるだろうか。

両棲類や爬虫類には、ない。なぜって卵を生みっ放しだから。

少し高級な鳥類では、卵を温めてヒナをかえし、餌を与えて育てる。

でもこれは、母性本能とは云っても、条件反射に近い行為である。

カモメを例にとろう。

カモメの親がヒナに餌を与える行為は、ヒナが空腹になると母鳥のくちばしの赤いホクロのような点をつつきたくなる遺伝的要素と、そこをつつかれると口を開きたくなる母鳥の要素の組み合わせだ。

母鳥が口を開くと、そこにはかみくだかれた食物がある。ヒナはそれを食べて育つ。

なにも母鳥は、ヒナをふびんがって養ってやっているわけではない。これは条件反射に近い本能的行為なのだ。

鳥類より高級な、哺乳類。

哺乳類のうちでも、下等なサイ。

子が生まれると、抱き寄せて乳をやる。

ここまでは鳥と同様な本能といえる。

ところが子が乳を吸い出してからが、ちがう。

この時点から、子どもを胎内で育てている時とはちがう種類のホルモンが分泌されはじめる。乳を吸われれば吸われるほど、このホルモンの分泌がさかんになり、子を溺愛するようになっていく。

これは授乳期間中続くのだが、離乳と同時にこのホルモンの分泌がとまり、子への溺愛も一巻の終り。

子と親がいつしよに棲んでいては、生きていけない自然のさだめから、子を追い出してしまふ。

昔、上野の動物園で、サイの子が園内の機関車の線路の上に乗っているのを見た母サイが、子を助けようと走ってくる機関車に体当りした事件があった。

崇高なる母性愛。と感嘆したくなるのだが、これも、平たくいえばホルモンのなせるわざである。

さて、更に高等な動物、サルのことを考えてみよう。

条件反射の本能と、ホルモン分泌による母性愛に加えて、サルの場合には、学習が大きな要素を占める。

学習といっても、人間の勉強とは話が

ちがつて、自分の体験したことが努力なしに意識下に吸収され、同じような状況になると甦ってくるのである。

母親に死別して飼育係に育てられたメスの赤毛ザルの話。

彼女が成長して娘になった。経験豊富なオスザルと一緒にしたところ、うまい工合に妊娠、腹の子も順調に育った。

ところが、いざ出産のとき。

なんとこのメスザルは、生まれた子どもをみて、パニック状態に陥ってしまった。生まれてきた「モノ」にさわつてみると、その「モノ」が大きな声で啼くと、母ザルは恐ろしがつて遠くへ逃げ、震えている。「モノ」が自分の子であるということが理解できないのだ。

自分自身、親元で育つたという経験がないために、体を通じて学んだものが何もなく、従つて子を受け入れることができないのである。

このようにサルにおいては、遺伝的ホルモンの要素とともに、体験的学習が大きな比重を占めてくる。従つて学習のチャンスが欠けると、そのまま母親失格になりがち。この子ザルも結局飼育係が引

きとつて、母ザルと同じ道を歩むことになつてしまった。

さて、人間の場合。

「人間は大脳の中に、一匹のワニと一匹のウマとを飼っている」

ケストラーという学者がこう云っている。これはどういう意味だろうか。

人間は先天的本能、無意識的学習という二つの要素に加えて、頭の中でリクツを考ふる知的要素を持つている。これら三つのバランスを保つことのできるのが、人間である。

さて人間の脳の中で、本能に関わる部分は大脳髓質が受けもち、知的学習の部分は脳皮質がうけもつている。

皮質の部分が成長していれば、無意識的学習が欠けていても、後天的教育で補うことができる。だからさつきの赤毛ザルのような母親失格の状態は、外面的には表われてこない。

しかしケストラーも云つたように、いかに高等な人間も、ものごとの決定を下す大脳の中には、爬虫類と下等動物の要素を持ち合わせている。彼の云いたいことは、人間の中の動物的要素を軽んじて

てはいけない、ということ。

現状では人間はそのことを忘れ、大脳皮質優先の頭でつかちになっているように思われる。

早く大きく育てるために、適温、栄養に気を配ることに狂奔している現在の育児法は、プロイラー飼育となんらかわらないのではないか？

生まれた時からすでに、不特定多数の看護婦に囲まれて、病院で保育されている新生児は、もはや自然界とのつながりを断たれている。

「私の育てたチンパンジーは、チンパンジーのように見えてチンパンジーでない」

チンパンジーを赤子の時から育てたアメリカの心理学者のこの言葉は、そのま

ま人間にも当てはまるだろう。人間は哺乳動物の一部である。大脳皮質の部分だけで生きて行けると思うのは、人間のおごりではあるまいか。おごりが行き過ぎるとき、表面的にはふつうの人間のように見えながら、実はさつきの赤毛ザルのような人間の変種がふえてくる

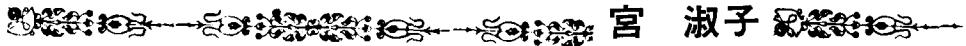
のでなのではないか、と私は怖れている。

(上野動物園飼育課長・まとも・福田悦子)



女のからだを知ろう

スペキュラム体験記



宮 淑子

産婦人科の診察台。目の前には白いカーテン。カーテンの向うのゴソゴソに、云い知れぬ不安と恐怖を抱いた経験が、女の人ならみんなある。

「あなたの顔は必要ありません。私のみるのは下半身だけ」と云われているような、非人間的な医師とのコミュニケーション。

それよりもまず、自分のからだの大切な一部であるセックスを、私たちはしかと眺めたことさえない。キタナイもの、グロテスクなもの、ワイセツなもの、触れるのさえ怖いもの。男の作った文化の中で、男が勝手に作ったイメージを、女たちも受け売りして、自分のからだを蔑んでいたことはなかったか……

「長い間産婦人科の医者に独占されてきた女のからだを奪い返すために、『女のからだ連続ティーチン』を企画します」というハガキにノコノコ出かけて行ったのは、だから私にとつても画期的なことであった。

女の感性がストレートに表現された本や、チラシがところ狭しとある新宿リブ

センターの一室。ティーチ・インのリーダーの若林早苗さんは、私の「常識的」な反応をまず、カンラカンラと笑いとばした。

「あなたのまわりで、とてもよいコミュニケーションを持って友だち同士、スペキュラム（子宮鏡）を使って体をチェックしあえる。そんな関係を女が持てたら、ステキじゃない」と若林さん。

「他人の体を見るのは抵抗あるなア。みんな恥ずかしがるんじゃない」と私。

「それはあなたが、あなたの先入観で話をすすめた場合じゃない？」
スタートはこんな会話の応酬からはじまった。

若林早苗さん。二十歳。この人の手にかかると、羞恥心がシッポをまいて退散していくよう。ストレートなもの云いが断然いい。

「この間、町なかで男がタッチションしているのを見ちゃったんだけど、男は自分のモノを公然と眺めたり、つかんだり出来るでしょ。そこが決定的に違うんだな。女のからだは自分の目で確かめられないものね」

つりこまれてティーチ・イン参加の私

たち五・六人、「実はねえ、私自分のセックスまでもにみたことないんだ」

「タンポン入れるのも怖くてねえ。どこまで入れたらいいか分らないし、イタイしねえ」

「私より彼の方が、ずっと私の体にくわしいみたい」

なーんだ、みんな私と変らないんだな。

「私もそうだったんだけど」雰囲気づくりが出来上がってきたところで、若林さんの「講義」が、スライドとともに始まる。



それは一昨年のメキシコの国際婦人年会議。いろんな国の女性が、いろんな運動を持ちよっていた。そこで出会ったのが、「フェミニスト・ウイメンズ・ヘルセンター」の女たち。この女たちとの出会いが、彼女にこの運動にとびこむキッカケを与えたのだという。

「フェミニスト・ウイメンズ・ヘルセンター」というのは、女たちのための産婦人科のクリニック。

今から四年前、アメリカ合衆国では中絶は非法下にあった。キリスト教のこ

の国は、胎児は生命を持っている、セックスは生殖につながっていると考えるに支配されていて、中絶の合法化を叫ぶ運動は長く激しくつづいた。

その運動の中で、最初にスペキュラムを使って女のからだの内部を見ることに着眼したのが、キャロル・ダウナーさん。みずから机の上で足を上げ、「スペキュラムを使えば、こうして子宮口が見えるのよ」とデモンストレーションをやったのけたのだという。

これを契機に、今まで医学に奪われていた部分の中で、素人でもできる部分を発見、それを女たちの手で、とロスアンジェルスに女のための産婦人科のクリニックを開いたのが、「フェミニスト・ウイメンズ・ヘルセンター」の母体。一時期、ダウナーさんが医師法違反で逮捕されたが、裁判で無罪をかちえ、そのことが逆にPRにもなつて、ロスから始まったこの運動は、今は全米に八ヶ所のクリニックを開く勢いとなっている。

クリニックの経営はぜんぶ素人の女たち。中絶手術をする医師だけが男で、アルバイトなのだという。この女たちに給料が支払われる。「女たちの費したエネ

ルギーが無報酬であつてはならない」というポリシーがあるそうで、運動の中で女たちが経済的に自立していられるなんて、日本では考えられないくらい羨しい状況だ。中絶の手術の収益がもつとも多いのだという。

スペキュラムの使いかた、避妊の相談、性病の治療……少し訓練を受けた女たちが、プロの医師よりいたわりと愛情をもつて仕事をして、コミュニケーションもずっとスムーズとのこと。手づくりのハンドブックもあるという。

メキシコ会議の足でアメリカに渡った若林さんは、オークランド（カリフォルニア）のクリニックで二ヶ月訓練を受け、ヘルス・ワーカーとして七ヶ月働いて帰国した。

スライドはこのクリニックが作ったものの。足を開いてスペキュラムを挿入した女の子宮口をのぞきこんで、七・八人の女が楽しそうに笑っている。アメリカの女たちの陽気さに、見ている方も楽しくなってしまう。

「人間の顔が千差万別のように、子宮口の大きさも形もさまざまなの、ホラね」
「この人ね、スペキュラムを使うのを

とてもイヤがったの。なぜかと云うと、男の産婦人科医から『君の子宮口はアグリード』と云われたことがあるんですけど」

とても可愛い子宮口なのにヒドイヒドイ。私とTさんが憤激する。

「ふだん子宮口のまわりはピンク。それが妊娠するとブルーになるの。おりものの量、匂いなど、ふだんから自分の体に親しんでおけば、僅かな体の変化も自分で感じられるじゃない。産婦人科にかけこむ前に、この位は自分で診察できるというわけ」

「フィン。なんでこんな便利なもの、今まで気がつかなかつたんだろう。」

「へーえ、これがスベキュラムなの」手にしたスベキュラムは、透明なプラスチックで出来ている、先の丸いアヒルの口ばしみたいなもの。腔に入れてレバーを引くと、腔が目いっぱい開いて、子宮口がコンニチハをする。産婦人科の医者は金属のスベキュラムを作っているが、これはアメリカの女たちが作り直したものだ。日本ではまだないので、若林さんがとりよせて女たちに分けているのだという。

「ではこれから私がやってみます」と若林さん。これだから本番。下半身をスイスイ見せちゃったから、みんなちよつとドッキリ。

左手に鏡を持ち、右手に懐中電灯を持って光を反射させると、スベキュラムで押し上げられた子宮壁から、子宮口が自分で観察できるしくみ。「私の子宮口見えるでしょ」どれどれ。

「うわっ、きれいなね」

「子宮口って、唇みたいなのね」

「ピンク色よ」

子宮って、こんなに近くにあつて、こんなに神秘的なものだったんだなア、感激！とところが……

「じゃあ、みんなもここでやってみて。スベキュラムのサイズは、L、M、Sと三種類だから、どれが自分にあうかためして。体格とは関係ないんだから」と若林さん。

ギョッ！ ツイにオイデナスツタ、という感じ。

「カレにしか見せたことないんだけどなア」

「寒いよねえ」

一瞬のきまりわるさを何とかつくり出して、観念した私たち、一列に横になって一気に下着を脱いだ。さあて、このスベキュラム、中々上手く挿入できない。ヘアをはさんだり、緊張しすぎたりで。うまく挿入できても、子宮口が見当たらない。アレ、アレ、と何回もやり直した。

「こんな時、アメリカの女たちは陽気なの。一寸待ってて、いま出すからね、とピョンピョン飛びはねて笑わすんだから」と若林さん。一回でできなくても失望しないで、何回もやり直すこと、と英文のパンフにもある。

ウア、できた。「どれどれ見せて」と若林さんがやってくる。ほかの人もやってきて、「きれいなねえ」

バンザーイ。自分のからだについて、こんなすてきなコメント貰ったの、初めてだった。

この夜、私たちはお互いのからだを見合っただもの同士の親近感の中で、体のこと、性のこと、とことん語りあった。女性の手による女性のためのクリニックが日本にも必要なことを含めて……。

(婦人民主新聞記者)



2



西田 としこ

3

一妻多夫と一夫多妻の国



昨年暮れから正月にかけて、私はヒマ
ラヤ・トレッキングをして来た。トレッ
キングとは、最近はやりだした山麓歩き
の旅のことである。

私たち十四人のパーティの中には、遠
征体験のゆたかな登山家もいれば、私の
ように口車にのせられて出かけて来た素
人もいた。ただ誰もが、世界の屋根ヒマ
ラヤの眺望をたのしみたいという気持ち
に変わりはなかった。

ポカラからジヨモソンへのトレッキン
グ・コースを、私たちはまず飛行機でジ
ヨモソンへ飛んでから、南へ向って歩く
という道を選んだ。その方が、総体的に
は山下りコースとなつて楽だからである。
ダウラギリ山群とアンナプルナ山群と
にはさまれたカリ・ガンダキの流れにそ
つた道は、古くからチベットと印度とを
結ぶ交易路だつたところである。昔なが
らの隊商の道を、いまま背中に入れて物
をつけた螺馬やドンキイたちが、鈴を鳴
らしながら往き来している。

ここに自動車道路が通るとき、このけ
なげな生き物たちも減り去ることになる
のだろうか。ちよつと大きめの犬はどし
かないドンキイも、時には羊たちまでも、
人間とひとつ運命に結ばれているのを承
知しているかのように、黙々とけわしい
山坂を越えて隊商の旅を続けている。

口笛とも叫びともつかない声をあげて、
その動物たちを追っている男たちは、一
度家を出たら旅をかさねて長いこと留守
になる。そのためか、山奥のチベット系
部族の間では女性が家の中の実権をにぎ
っているところが多い。

私たちは天幕の旅を続けたので、一般
の民家へふかく入りこむことはできなかつたが、一度リーダーについて村長の家
へ馬を頼みに行ったことがある。気のい
い主人は、しきりにロキシ―(トウモロ
コシ焼酎)をすすめ、カタコトの英語で
話そうとするが、囲炉裏の反対側に立て
膝で坐っている妻君は、ニコリともせず
に時々薪をくべたり、子どもにロキシ―

を持ってこいと指図をおくるだけだった。「母ちゃんの方がいばつてるね」

とリーダーは小声でいったが、お人よしの亭主をひややかに眺めて貫禄十分という様子に見えた。

奥地の部落では、一妻多夫の風習があるという。兄弟一妻婚、叔父甥一妻婚、また実母でなければ父子一妻婚もあるそうだ。貧しい暮らしの中で、財産を分けたり、働き手が分散することは不利だという考えがその根底にあるらしい。

しかし、年齢序列があつて、兄の妻と弟とは結ばれてよいが、弟の妻に兄が手を出すことはタブーとされている。父や叔父の妻を息子や甥は共有できるが、逆に甥や息子の嫁と目上の者が結婚することはできない。これで彼らなりの秩序は保たれているのだろう。

ここでは、長男である夫が出稼ぎに出ている間は、家に残った次男の夫に、同じようにつくすことが貞女？なのである。生まれる子どもはどちらの父親からの受精かなどという詮索はぬきで、生まれてくる順に、第一の夫の子、次が弟の子と決められているそうだ。

山旅を終えてから私たちは、ネパール

王国の首都カトマンズでしばらく遊んだ。

中世がいまなお続いているようなバザール風景と、近代的な商店街とが雑居した奇妙な街であつた。日暮れまで、牛がノソノソと歩きまわっている。ヒンズー教で牛は聖なるものとされているために、誰かが餌をやっているのだろう。時にバザールの八百屋に鼻づらをつつこんだとしても、大目に見てくれる国なのだ。

釈迦が生まれたネパールで、仏教よりもヒンズー教が国教となつているのは、仏教の平等思想よりも、「人間は生まれながらに差別がある」というヒンズー教の方が、施政者にとって都合がよかつたということだろう。

カーストと呼ばれる階級制度が今も厳然としてある。第一階級のバラモン（僧族）から最下層のスードラ（奴隷）までのカーストのほかに、パリヤという不可触賤民がいるが、彼らはほとんど人間としての扱いをうけていない。神（ブラーマ）が人間をつくつたときに頭からバラモンを、肩からはクシャトリア（士族）を、腹からはバイシャ（平民）を、そしてスードラは足から生まれ出たというヒンズーの教義がその根拠というわけであ

る。

カースト意識がいかに強いかという一例として、この国にも公教育がはじまり、就学率は五五％になつたというが、子どもたちはカースト別に遊び、カースト毎に弁当を食べるのだそうである。私たちが泊つたホテルの子どもも、隣家の子とはカーストが違うから遊ばないといつていた。

カトマンズ周辺にはヒンズー寺院がたくさんある。そしてその御神体は性器そのものか、俗に歓喜仏という類いで男女交合の姿態を赤裸にかたどっている。街中にもアツと驚くほどの絵馬を見かけた。しかし、カトマンズの風物の中で見るそれは、無邪気でおおらかでほほえましくさえある。

飢饉や悪疫が流行すれば、たちまち人口が潰滅してしまう国なのである。今でも平均年齢が三十何歳といわれるこの国では、たえずセックスを奨励する必要があつたのであろう。

そのくせ、カトマンズの目ぬき通りの群衆の中にも男女つれだつて歩く姿などなかつた。この国はいまも徹底した男尊女卑の国なのである。嫁ぐことは、女奴

隷になるにひとしいとまで言う人がいる。そして夫が死ねば、生活のすべをもたない寡婦は生きながらともに焼かれるという風習があったという。ヒンズー教は一夫多妻を認めているから、三人妻がいれば三人とも殉死するわけだ。

「三人いたから争って死ななければならなかったんじゃないかな」と意地悪い憶測もしたくなる。

一夫多妻の風習はいまなお、貴族や大地主の間に残っているという。二人以上の妻は姉妹の場合が多く、妻の妹たちとは自由に性関係を結べるが、妻の姉や母との間はタブーになっているそうである。そうしたモラルの違いはあっても、人々の生活は比較的堅実なように見うけられた。これはふしだらなことをして、カ

ーストから放逐されたら生きていけない。きびしい現実があるためかもしれない。

ネパールは一九五〇年に、それまで権力をにぎっていたラナ将軍が国王に大政を奉還したことによって、鎖国をといた。この間の事情は、日本の明治維新を思わせて興味ぶかい。いまは王政復古から三代目のピレンドラ国王の時代である。三十歳になったばかりの青年国王だが、王妃はラナ将軍家の出だという。国民に向って一夫一婦を説く国王だが、その実、英国留学中からの恋人を思いきれずにいるという巷の噂である。街のいたるところに近代青年らしい国王と、きかんらしい王妃の写真がかかげられているが、この公武合体結婚のかげに人間苦悩が

つきまどっていることはたしかなようだ。また、カーストの廃止をとなえる国王だが、自らもまた、封建的なカースト制度によって支えられているという矛盾はどうしようもない。

折から離宮のあるボカラの町では、滞在中の国王夫妻のために、ものものしい歓迎のアーチが並んでいたが、ある女性

は、「王様が帰れば、みんなとっちまうのさ」と事もなげに言った。ちなみに彼女は、グライ・ラマについてチベットから亡命してきた難民の一人であった。

参考文献「ネパール王国探検記」川喜多次郎 「男は神様の国」恵下湧 「ヒマラヤの花嫁」平尾和雄

荒野に叫ぶ声

平石とみ



婦人保護施設における体験をもとに書かれた本書は、現在も変らぬ非人間的な「福祉行政」をすまなく告発する。それはまた、戦後をたくましく生き抜いた、ひとりの女の歴史ともいえよう。
跋文＝郡山吉江／装幀＝小倉美千子
1200円

女・エロス 8

発売中
780円

特集1 つくられる女権
私とエロスと天監制／つくられた女なんて知らないよ／毒舌／女と男の間にて／日本の女性像

特集2 生きる女の知恵づくし
子づれて期は、女の文化を／かけこみ寺／女のからだ／レジスタンス女のたのしみ

社会評論社

〒113 東京都文京区本郷2-5-10
電話 (814)3861

投稿者へのおねがい

書き出し、改行とも、原稿用紙のマス目を一字分あげてから書いて下さるようにおねがい致します。

句読点はそれぞれ一字分とり、次のマス目はあけないで書いて下さい。「、」
「へ、へ、」なども同様です。どうぞよろしく。

編集部

伊豆へ行ききたい方へ

伊東で牧師館が一軒借りられます。大きな台所、食堂、炊事用具一切ついて一人一泊千円。十人くらいまで何人でも可。ただし温泉はなし。
連絡は編集部へどうぞ

今こそ女の代表を

国会へ!

「政治をかえたい
女たちの会」
からのアピール

政治や制度を変え、女解放、子ども解放、そして男解放の世界を実現させるためには、わたしたち女の声を適確に国会で反映できる真の女たちの代表を送る必要があります。「政治を変えたい女たちの会」は、このような主旨で誕生しました。様々な討議の結

どこにも売っていない

手作りフッキー

わいぶ編集部推薦、菓づくり教室の倉橋さんが長年の工夫で生みだした高級な味。健康によい材料でできています。砂糖市販の半量。

くるみの入った三ヶ月フッキーなど、最高においしいの時倉橋さんのフッキーを賞味されました。お見舞や、手土産、次の三人を推すことに決めました。今迄の政治に失望している皆さん、女の力を今こそ発揮しようではありませんか。

- 田中すみ子 (社 会 党)
- 吉武 輝子 (無 所 属)
- 俵 萌子 (革新自由連合)



産にもせひどうぞ。もちろん市価よりお安いです。量がまとまればお届けします。

(03) 四六八四一四一
倉橋へ

女がつくる女の総合情報誌

〈あごら〉16号

特集・女と結婚 164ページ 750円

資料誌としてバックナンバーもご活用を

- | | |
|--------------|--------------|
| 1 女が働くこと | 11 女と教育 |
| 2 女性と能力 | 12 国際婦人年世界会議 |
| 3 主婦の解放 | 13 国際婦人年を考える |
| 4/5 壁を破ろう | 14 女の記録入選作発表 |
| 6/7 運動をすすめよう | 15 職場の中の女性差別 |
| 8 子殺しを考える | 〈近刊〉 |
| 9 働く女と主婦の接点 | 17 女と生涯教育 |
| 10 女と法 | 18 女と老後 |

●年間購読料 4,000円 (送料とも)

東京都新宿区新宿1-9-6 〈あごら〉編集部

TEL 354-9014 振替 東京0-5264

アジアの女たちの会

「女大学」のおしらせ

第二回
性侵略—この現実
六月十五日六時半
松井やより
第四回
在日アジア女性との
対話
七月二十日六時半
いずれも渋谷労働福祉
社会館の予定
電話五〇八七〇七〇
五島へ 昼間のみ

皆さんのコーナーです。どんな事でもお寄せ下さい。

お能拝見

お能のみかた・楽しみかた

和田好子



■昔の名曲・今の名曲

それではまず、どういう名曲を見るかというお話をいたします。

いきなり妙な話から入りますが、お能といねむりはつきもので、はじめて見に行ったが、ねむくて困ったという人は多い。私も、ある友人を案内していった時、その人が隣でいねむりをはじめ、こっくり、こっくりのうちはよかったが、しまいに私の肩に頭をのせ、しなだれかかってきて、たまたまその人は大柄、私はごくの小柄ときているので、重くて閉口したことがあります。

また染井のことですから、ずっと昔ですけれど、「定家」というお能が出ました。このお能は下手のやるものではありません。若い人はやらないし、習練を積んだ名人級の人が演ずるいわゆる重い曲なので、私も見たのはこのときがはじめ

てでした。「定家」は、読むと現代的名曲で、式子内親王と藤原定家との宿命的な恋の物語です。ところが見るとすこぶる動きが少くて、名人がやったところでなかなかおもしろくはみせられまい、というような曲でした。これは謡が、ことに地謡（コーラス）がよっぽどよくなければならぬし、シテはただそこに坐っただけでも、観客が見ても見あきぬほど、美しい型をしていなければならない、そういう至難なものだったので。

その時のシテにしても地謡にしても、けっして不足のあるような人たちではなかったのですけれど、むずかしい上にもむずかしい曲だから、意外の感をまぬかれませんでした。

私のななめ前に、少々お年を召した男の方が、謡本を控えておりました。舞台を見ず、じっとうつつむいて本ばかり見ていましたが、謡を習っている人にはこういうのが多いので、気にも止めずにいたところ、突然、グー！ とあたりに響き

わたる大いびきをかいたのでビックリ。なにしろ「定家」です。あだやおろそかな舞台じゃありませんから、見所中静まり返り力み返っているところへ、グーときた。はつとあたりを見回すと、そこら中の人がねほけまなこでおどろいているさまが、はつきりわかりました。つまりいねむりしていた人たちが、グーにおどろかされて目をさましたのです。

シテに失礼とも気の毒とも、いいようのない事件でしたが芸の道はきびしい。あんなに大ぜいにいねむりをさせたのは、シテの芸が至らなかつたというほかないでしょう。

■宴會がてらに観る

しかし見所のいねむりは演者ばかりせめられない面があります。

今どきの能楽では椅子席で、映画や西洋の近代劇を見るように、はじめから終りまで、すわったまま静肅に舞台をみつめているといふ鑑賞のしかたが、なんのふしきもなくまかり通っていますけれども、本来お能はそのようにして見たものではありませんでした。

能勢朝次氏の「能楽源流考」という大著の中に、「演能曲目考」として、室町時代の演能記録を調査し、どんな曲目が演ぜられたかを書き出してあります。

たとえば、

永予四年・三月十四日 伏見宮御所にて矢田猿樂演能。

(演目)みすず・かつほの玉・すみだ川・三蔵法師・自然居士・九郎判官東下向・重衡・よこ山・井手玉水・曾我五郎元服・白拍子しづか。(看聞御記)

などであり、一日の演能にじつに十一番が演ぜられているのです。現在では一番の演能に一時半から、長いもので二時間程度を要しますので、当時もそうだとすればあわせて十六、七時間、早朝からはじめたとしても夜半に及び、いくらなんだって……という気がします。そこで昔のお能は短かつたのだ、演出の仕方が違って、一番三、四十分でやつてしまつたんだ、という説が出てくるのですが、たしかにそういうことはあつたかもしれないけれども鑑賞の仕方も違つていたのです。いろいろな記録に残っていることですが、昔は見たいときに入場して見たいものを見、お弁当を食べお酒のみ、つまり宴會をしながら見ていたわけなので、一人の観客が十時間以上も、じつとすわったまま舞台をみつめていてということはありません。もしそんなことをしている人があつたら、周囲が怪しんで、気が狂つたか、あるいは妖怪変化のたぐいと見られたのではないでしょう。こういう鑑賞の仕方は歌舞伎でも同様で、わが国の伝統的な観劇作法です。

さきにも書きましたが、染井能楽堂は畳敷のマス席で、私が見ていたころはまだほんの少々、昔ながらの鑑賞法のなごりがありました。

あるとき、私の前のマスに五、六人のお年寄りのご婦人が陣取っていて、まず最初の一番がすみ、仕舞(お能の舞いどころだけを衣裳をつけずに舞ってみせるもの)になると一人がお茶を買いに行きました。例の二十円だったかのお茶です。お茶がきますとお菓子の箱が出ました。お菓子は上等の生菓子で、それをつまみながらべちゃくちやしゃべる。

「ちよつとちよつと。あの人（舞台で仕舞を演じつつある能役者）あんなに大きくなつたわよ。まあ、隅田川の子方こなたな
んかで出ていたのがついこないだなの……」

「そうね。うちの孫娘と一しよのところで、鼓習つづつてるよ」

「何いつてるの、自分の年をお考えなさいな。あなた八十
でしょ、あの人がだつて大きくなりもするわよ、大きくなつた
どころか、もう三十だわよ」

「あらイヤだ、わたしまだ八十じゃないわよ」

「どうして！ あなた四月生まれでしょ、今は五月ですよ
五月！」

「そう？ アラ、今日は五月だ。じゃあ、もう八十になつ
たんだ」

聞きながら私はおかしくつて困りました。

こんなことを、今どきの銀座の能楽堂なんかでできるもの
でしょうか。

日本の演劇はお能も歌舞伎も、このような鑑賞法を前提と
してつくられています。それをイヤ、古典芸術を鑑賞せん、
などと息ごんで、西洋近代劇を見るようにしゃつちよこばつ
て見ていては、いねむりが出るのもあたり前なのです。

そこで現今では、演ずる番数を減らし、二番か三番、とく
に初心者に見せるための催しですと、一番だけということも
あります。さもなければたまつたものではありません。

昭和のはじめ、バーナード・ショウが来日して、お能を見
せられ、退屈、退屈、退屈！ と、露骨にわる口を言つたと
いいますが、戦後來日したジャン・ポール・サルトルのほう
は、「葵上（あおいのうえ）」を見て、「こんなおもしろいもの

を、日本人はだんだん見る人が少くなつたというが、どうし
てだろう」と言つたそうです。

昭和のはじめにはまだ五番能というのがさかんに催されて
いましたから、ショウはいきなり能楽堂へつれ込まれて、朝
から晩まで見せられたのではないでしょう。サルトルの場
合は「葵上」一冊だけでしたし、演者もすこぶる上等で、お
そらく優秀な通訳もついていたと思われれます。

私は、お能は外国人にはまず理解できないと思います。わ
が国の最美の演劇に、国際的普遍性がないのは残念ですが、
露をだにいと大和やまとの女郎花やなぎはな、降るアメリカに袖は濡らさじ。
お能という永遠の美女を、われわれだけで独占するのも悪く
はありませんけれど、その外国人ですら、一番だけ、名曲を
名演技で見ればかなりわかるのです。

いねむりと鑑賞の仕方、どういふものを、どれだけ、どう
いふ態度で見るかということとは、このように密接な関係が
あります。

■現代人のおすすめ演目

そこで……たいへん話が遠回りをしましたが、私は、昔日
観客が宴会がてらに見ていたころ、名曲とされていたもので、
数多く演ぜられていたものが、必ずしも現代の私達にとって、
名曲ではないと言いたいのです。

現代ではお能は西洋近代劇ふうには、音楽会ふうには鑑賞され
ます。染井能楽堂も今やなく、文句を言つてもはじまりませ
ん。

見慣れてくればだんだんにレパートリーがひろがり、ちよ

つと現代人には理解不可能と思われるようなへんてこな曲でも、おもしろく見られるようになるものですが、はじめのうちは番数と演目によほど注意をして、三番だての別会（特別の大きな催し）なんか敬遠したほうがよろしいと思います。おすすめめの演目としては、次のような曲をあげておきましょう。

清経（きよつね） 巴（ともえ） 松風（まつかぜ）

柏崎（かしわざき） 鉄輪（かなわ） 蟬丸（せみまる）

自然居士（じねんこじ） 善知鳥（うとう） 葵上（あお

いのうえ） 道成寺（どうじょうじ）

お能には演ぜられる順序がありまして、一番目から五番目まで、演目が分類されており、それを並べて番組プログラムが作られます。一番目に分類されている曲は、けっして二番目以降に演じられることはありません。

一番目は、神能、脇能物とよばれ、シテはたいいてい神様です。

二番目は、修羅物（しゅらもの）といい、シテは武将で、戦いくさの物語をします。

三番目は、鬘物（かづらもの）で、美しい女性がシテです。天女、后妃、貴婦人、花の精などが主人公で、序の舞というゆるやかな舞を舞います。

四番目は、狂女物（きょうじょもの）と呼ばれ、狂女を主人公としたものが多いのは事実ですが、その他の遊狂物、人情物、怨霊物、執念物、等々、種々雑多な内容のものが全部ここに含まれます。

五番目は、鬼畜物（きちくもの）で、鬼、天狗、獅子、狸

々、きつね、ぬえなど、まあ妖怪変化のお能といつてよろしいでしょう。キリ（最後）に演じられるので、切能ともいいます。

そこで、今あげましたおすすめめの演目を、五番の順序にあらはめて分類してみますと、

清経・巴（二番目・修羅物） 松風（三番目・鬘物）となり、それ以外は全部四番目物なのです。

四番目は、種々雑多ですから変化に富み、素人むきだという面はたしかにあります。能がまだ日々創作される現代劇であつたころ、作者が意欲にまかせて新しい試みを次々と生み出していった。そのバイタリテイがもつとも感じられるの



が、四番目のよき、おもしろさなのです。

例の「能楽源流考」がたんねんに洗い出した室町時代の演目をさらに分析すると、時代が下るにつれて劇的な構成の曲目が喜ばれるようになっていくそうです。（林屋辰三郎著 歌舞伎以前）

■もとは大衆演劇

能は世阿弥の父観阿弥が、「大衆に愛され支持されてこそ一座は栄えるものだ」といい、地方巡業をし廻っていたころは、大衆演劇であつたのですが、息子の世阿弥が幼時から貴族的教育を受け、將軍の寵童となつて高い教養を持った観客を相手としてから、芸術的に洗練され、貴族趣味の強いものに傾きました。それが戦国の争乱のなかで、今の私どもの感覚からすると意外にも、農業、商業の発展、進歩を見て、余裕のきた庶民たちが、ネコもシャクシも謡をうたい舞をならい、素人劇団を結成して、あつちでもこつちでも能を演ずるといふ現象がおこり、ふたたび能は大衆化していきました。これは江戸時代の初期まで残つたふんい気であつたようです。その後武家式楽となつて、ふたたび貴族化するわけですが、この波のうねりのような大衆化の時代に、好まれ多く上演されたものこそ、四番目物なのです。

当時の好みには、またある傾向がありますが、私がえらんだ七つの四番目ものは、それと一致しているわけではありません。せん。

これらはいへん暗い、悲劇的な曲目です。

四番目物には、ずいぶん劇的な、変化に富んだもの、はな

やかで楽しいものもありますのに、あえて暗いものばかりを選んだのは、中世においてこのような暗黒の思想は深く、それは現代人に生と罪、愛と地獄の深えんをのぞかせ、ぞつとするような発見を迫るからです。それは現代の思い上つた人間主義が欠く思想であり、非常に「見ごたえ」があります。七番のうち、柏崎と自然居士は、中世の現実の生活をまのあたりに見せてくれるものとして、選びました。いわばタイム・トラベルのおもしろさです。

で、一番目の脇能物と、五番目の切能物は除外したわけですが、これは見慣れないとピンと来ない場合が多いからです。私も、脇能物というのは、なんだか神おろしの儀式そのものみたく、神様が出て来て舞つてみせるけど、まア高級なお神楽だなア……ぐらいに思つていたものでした。

しかし番数を重ねるうちに、分つてきます。そのよさというのは……

私は夫の転勤で生まれてはじめて箱根山を越え、大阪で足かけ八年の歳月を送りましたが、いよいよ本社へ帰れることになつて、お名残りに一人で京都へ遊びにいき、上賀茂神社に詣でました。おりから晩春の雨あがり、神域の山はあおあとおと香り立つて、すき通つた流れにのぞむ大鳥居、人ひとり通らない静寂、なんといい美しさ、清らかさ、神々しさ……ああ、これが脇能の世界なんだなあ……と感じいました。脇能はきよらかでさわやかな、そしてはなやかな感覚の世界なのです。

（つづく）

エンピツとハガキ おしゃべり それだけで書ける



ありのまま

新座市 匿名希望

末っ子が就職致し、さあこれから何かに生きがいと思いましたが、所いチャンスに恵まれ「わいふ」が送られて来るのが大変たのしみです。

所が折も折、主人が会社をやめ家につたり、いちいちうるさくつてなにもかも行動を共に。これが昔からの習慣になっていたため、只今ではとび出した心境です。この分では老後が思いやられる次第です。明治人間ですから私は何かにつけ服従故。初めが肝心、大失敗いたし後悔して居ります。二人別個の人生を歩みたいものです。

今後「第二の人生」をテーマに、つまり子育て完了の「老夫婦のあり方」をおねがいたします。

大きな世界が

姫路市 本谷 和子

この本のこと、とある雑誌で知りました。書きたいひと、考えたいひと、知りたいひとと始まる文章に魅せられ是非読んでみたいくなりました。

私たち主婦にとって目まぐるしく移り変わる

社会の動きや問題等とは縁遠い感があります。ともすれば新聞すら読まずに日を送っていることがあります。物事を書き、考え、知り、怒る、それらの力がだんだん衰えていくのが主婦ではないでしょうか。そんな私たちに問題を提起し考える場を、力を与えてくれるのがこの「わいふ」だと思います。「わいふ」を通して今まで知らなかった大きな世界が開けていくような気がいたします。この本との出あいを大切にいつまでも心の友として付き合っていきたいと思っております。

責任回避

千葉県 長田 綾子

私は、「ウーマンリブ」という言葉を聞くとき、すぐ中ピ連・榎美沙子のイメージが沸きまします。確かに一部の男たちがおっしやるように、彼女等の行動にはいきすぎの所もあるでしょう。しかし彼女たちをあそこまで過激な行為に追いやった原因が現状社会にあることは見逃せない事実だと思います。その点を問題にしないで、表面の現象だけをとらえてせせら笑ったり、軽蔑してすませるのは人間として責任回避のような気がします。

「家庭科に何を求めますか？」

北区 柳橋 利枝

昨年十一月に結婚して、広島から東京に出てきました。四月から川口市内の小学校に念願の正採用になります。学級担任を希望しておりましたが経験を生かしてほしいと、家庭専科に決まりました。

雑学的な家政、家庭科から逃げだそうとしていた私でしたが、まだまだ悩み考えねばならないようです。しかし、小学校の家庭科は男女共修ですのでやりがいがあります。親は小学校の家庭科をどう考えているのか、家庭科に何を求めているのか機会があれば「わいふ」で取りあげて下さい。

未熟な母？

品川区 田中 和子

こんなにも乾ききっていたのかと思われる程にどの誌からも出会いたかったことばや表現にすっかり潤おされました。一時に全冊読み終えたい欲を、ここはあの人に、こっちはこの人に是非読ませたいなどと知人の日頃を尺度にしながら、何よりも私自身の大きな糧に出会った喜びでいっぱいです。

やがて四十代に仲間入りするのも真近か、

暦だけがせつせつと規則通りに過ぎゆくのにいつまでたつても自分の方角が見出せずに、育つてゆく子どもに迷い読後の後姿しかさらせない未熟な母親として求めるものが確かに見出された思いは感激に等しいのです。

まずは一人の女性として在りたいとの希いがいつも外側で、嫁、母、そして辛うじて妻でもあったような生活の地盤から逃れたがってばかりいる私は育児期間を了え、中年期へのさしかかりのほんの手前でもいつも同じ足型の上でとめようもない足ぶみを続けています。どうか手をつないでください。

女同志のふれあい

目黒区 木村 道子

「女」わいふを送って頂き、つれづれなるまま毎夜家事から解放された安心感にゆくりと読ませて頂いております。私は晩婚でやつと結婚三年目を迎えた今になって女にめざめました。と申しますのは「性的」なそれではなく、女同志のふれ合いにとという意味なのです。独身時代の女同志の語らひは、楽しく蝶々の様に春風と、とりどりの花々とに囲まれてはいたけれど、ひ弱さもありました。今は少し違った部分を感じられます。主婦と

しての自覚と同時に少々の不自由さにめげず自分たちの同志を見出そうとするひたむきとも、あがきとも思える様な強さと重さがあるのです。

生活の中で女が女でなければ感じられないものと、夫や子ども以外の色々な雑事をふまえた上での意見交換や語らひは、私にとって意義深いものになりました。強さ、重さが専業主婦のしぶとさやいやらしさにならぬ様努力し、よいワイフであり、よき「わいふ」の愛読者でありたいと思っております。

創造的な人生を

豊島区 高田 敦子

なぜ結婚するのか「面白く拝見しました。私の場合、七年間の交際の後に結婚しいわゆる新婚時代と呼ばれる時期にはもう十年ぐらい一緒に生活しているようなそんな感じでした。何の打算もなく誰と人生を歩きたいかと考るとき、やはり互いに必要としたのでしよう。私は「その人の為に死ぬるか」と考えました。

現在、同年令の子どもたちを持つ母親のグループを作って、楽しくやっています。創造的な人生を送っていきたいと思っています。

「ゆめ」?

練馬区 青木 やよひ

「わいふ」の最近号、すみからすみまで拝見いたしました。とても充実しています。あそこに書いていらした方と練馬の婦人学級で出会ったりました。あっちこっちでそんなことが起つて、「婦人公論」や「主婦の友」より「わいふ」の方が部数が多い、というようになつたら世の中大分よくなるでしょうね。というより、そうなつたら女性だけの本なんていらないかもしれません。

お疲れでしょうがどうか頑張ってください。

「勇気が出ました」

豊島区 岩谷 みゆき

私にとつて始めての本「わいふ」一四四号、読み終えました。樋口恵子さんの「なぜ結婚するのか」は私の思っていたことが書いてあったのでとても勇気が出ました。回りの人々がそのことを理解してくれたらもつとゆつくり考えられたのに。

「結婚いまと昔」「続生活旅行」はおもしろくたためになります。「おしゃべりコーナー」自分だけが苦しんでいるのではないというこ

とに気付き元気が出ます。悩み等を話し合い、解決の方向へもつてゆける機会があつたら良いなあと思います。(座談会等)全体にページ数が少ないため内容がちよつと浅くなつてしまふ気がします。(特集などはとくに)：これは金の問題がからみますが、編集部のみなさんががんばってください。

門戸の広い雑誌に

松戸市 泉 光子

友人に勧められて、一四三号より「わいふ」を購読させて頂いています。

第一子を育てる時は、それこそ夢中で日々を過してきた私ですが、第二子が一才を過ぎた最近、特に日々に生活に何か物足りなさを感じていました。そんな折この雑誌を知り大変嬉しく思つた次第です。毎日の献立や家計簿のやりくり子どもや夫のこと以外に「考える」「作業を忘れていた主婦、何か漠然と考えるのだけれど一向にまとまりのつかない考え」「書く―作業を忘れていた主婦、こんな主婦に「わいふ」は考える機会、書く機会を与えてくれる雑誌と思います。気にならないで誰でもがいつでも参加できる、そんな広い門戸の雑誌であつて欲しいと思います。

私のねがい

東大和市 宮崎 るりえ

娘が生まれて早や九ヶ月、鼻かぜをひいたくらいで順調に育ち今のところ安心している。私が寝るときおむつを換え、じつくりわが娘の寝顔をみてつぶやく、「奏(かなで)、お母さんに子育ての能力が備わっているかどうかわからないけれど少なくともあなたを不幸にしたいかと思う、そして出来ることならばあなたを育てることによつてお母さんも人間として成長したい。あなたがぐずついたり泣いたりした時、お母さんもカッとしたり、悲しくなつたりする時があるのよ。でもそれは自分との戦いなの、あなたが自分自身と戦う人間になつて欲しいから。

お母さんね、あなたに決して云うまいと思つた二つのことがあるの、一つは「人に怒られるからやめなさい」という云い方、本当に思ひやりをもつた人になつて欲しいから。もう一つは「女の子なのだから」という云い方、一人前の人間になつて欲しいから、一人前の人間である事は一人前の女だと思ふのね、そんな風になれたとき本当の意味で男の人を愛することが出来るのじゃないかしらと思ふの。

——なあって、自分が出来が悪いものだから娘にはかり託して、なにはともあれ健康に育

つてネー

娘におやすみなさいの口づけをして、パチンと電気を消す。

明日も忙しい一日が待っている。

地方に支部を

枚方市 板倉 さち子

手元に三冊の「わいふ」が揃いました。何度読み返してみてもおもしろくあきないものばかりです。皆様の力作に刺激され少しでも近づきたいものだと思いたたせてはおりませんが、なかなか思うようにはいかないものです。

ところで関東から関西と、この広い地域の会員の皆様方との親交を温めるという意味でもそれぞれの地方の支部があつたらなあと思っています。年に二・三回でも集つて例会なり勉強会なり出来たらより皆様との連帯が出るものではないでしょうか。

五木寛之に凝っています

新宿区 鈴木 満由美

「青春の門」に始まつて今「風に吹かれて」を読んでいます。おもに通勤電車の中でと就

寝前の床の中ですが文庫で八冊読破しました。私は一人の作家が氣になると全作品を読まずにいられず、そのやり方で私なりの読書を系統だててきたつもりです。

大学二年の頃、倉橋由美子に凝っていた時点から自分でも小説なるものを書きだしましたが、自己満足の域から一歩も出ていないとは本人も自覚しながらも、「婦人公論」に何度応募しても拾ってもらえず、この半年程書くことさえもしなくなり同時に読書にも遠のいていましたが、書き出しのごとく、筒井康隆、以来の凝りようで「五木寛之」に夢中です。

あと二人の娘：

海老名市 延原 道(男)

「わいふ」に集まつておられるような婦人が多くなる程日本は良くなって行くでしょう。私には三人の娘がおり一人は嫁ぎましたがあとに二人。特集の結婚観は大変興味深く読ませていただきました。

下手のものまねで私は四十年にわたり詩を作っております。道はタゲシと読みます。仲ただしい道は歩めません。

ニンニク健康法

大田区 原 ゆう子

今日は我家の健康法をお知らせします。参考になれば良いのですが。このところ真冬に風邪をひかない我家の秘訣はニンニク酒、今年は皆さんもいかがですか。出盛りの頃作っておかれると良いと思います。材料は焼酎一、八〇、ニンニク五〇〇g、氷砂糖三〇〇、五〇〇g、レモン五個、青しそ一〇枚、根しようがーかけ。ニンニクは一かけづつにし皮のまま十分程蒸す、その後皮をむきレモン、しようがのうす切り及び青しそと共に梅酒用のピンに氷砂糖は少なめに入れ男性向きに、甘い方がよい方は飲む時に普通の砂糖をとかします。三ヶ月程置けば飲めます。尚一度に量を飲みすぎないように。(グイ飲み一ぱい程度)風邪のひき始めに飲めば効果バツグン。子どもにも大人の五分の一度度をジュースやはちみつにとかして与えると四・五回でせきも止まります。

新宿区 上沼 博子

人恨む思い消しつつ歌詠めば
写経の如く心しづもる

投稿規定

投稿は原則としてすべて掲載
します。

予約購読者はどなたでも投稿
できます。

(一) 随筆、随想。テーマ自由、
二千字まで。

(二) 持込み原稿。形式、内容、
長さ自由。特集テーマ原稿、
評論、問題提起、文芸作品
など。ただし、掲載は編集
部で協議の上、決定いたし
ます。

(三) おしゃべりコーナー。おた
より、家事のヒント、「わ
いふ」への注文など、葉書
一枚から千字程度。

〈編集だより〉

☆戦後、家族制度から解放され
た反面、男女の性的分業が一層
強くなり、私たちは小さな核家
族の中に、こどもといっしょに
閉じこめられています。この状
況の中で、私たちは「母性」を
どうとらえ、どう生きていつた
らよいのでしょうか。

★軍国の母が教育ママに変わり
はては子殺しの母……どれも違
ったもののように見えながら、
実は深い所では同じ根につなが
る社会的産物のようです。この
特集で、ほんの少しでも、その
「根」に光を当てることが出来
たら、と思います。

〈お知らせ〉

☆148号のテーマは「ニューファ
ミリーの実体」です。ニューフ
ァミリーらしき風俗はちらちら
目につきますが、その実体は何
なのでしょう？ 色々な角度か
ら掘り下げてみたい、と思いま

す。御投稿は七月末日までに。
★148号から、公開編集会議を開
くことになりました。わいふの
企画、編集に、会員の皆さまの
積極的参加を期待します。

第一回目の公開編集会議は、
七月一日(金) 一時半より。

会場は未定。ご参加の方は会場
を、(〇三)二六九一二三八八
(林宅)までお問い合わせ下さい。

〈お願い〉

☆予約切れのまま、購読中止の
ご連絡もなく、ご送金もない方
が多いのです。事務処理上困っ
て居りますので、この号が付き
次第、よろしく願います。

四方さんの「主婦の長電話」
はじめ、「母性愛さまさま」な
ど、146号には興味深い問題提起
が見られます。感想、反論をお
待ちしています。

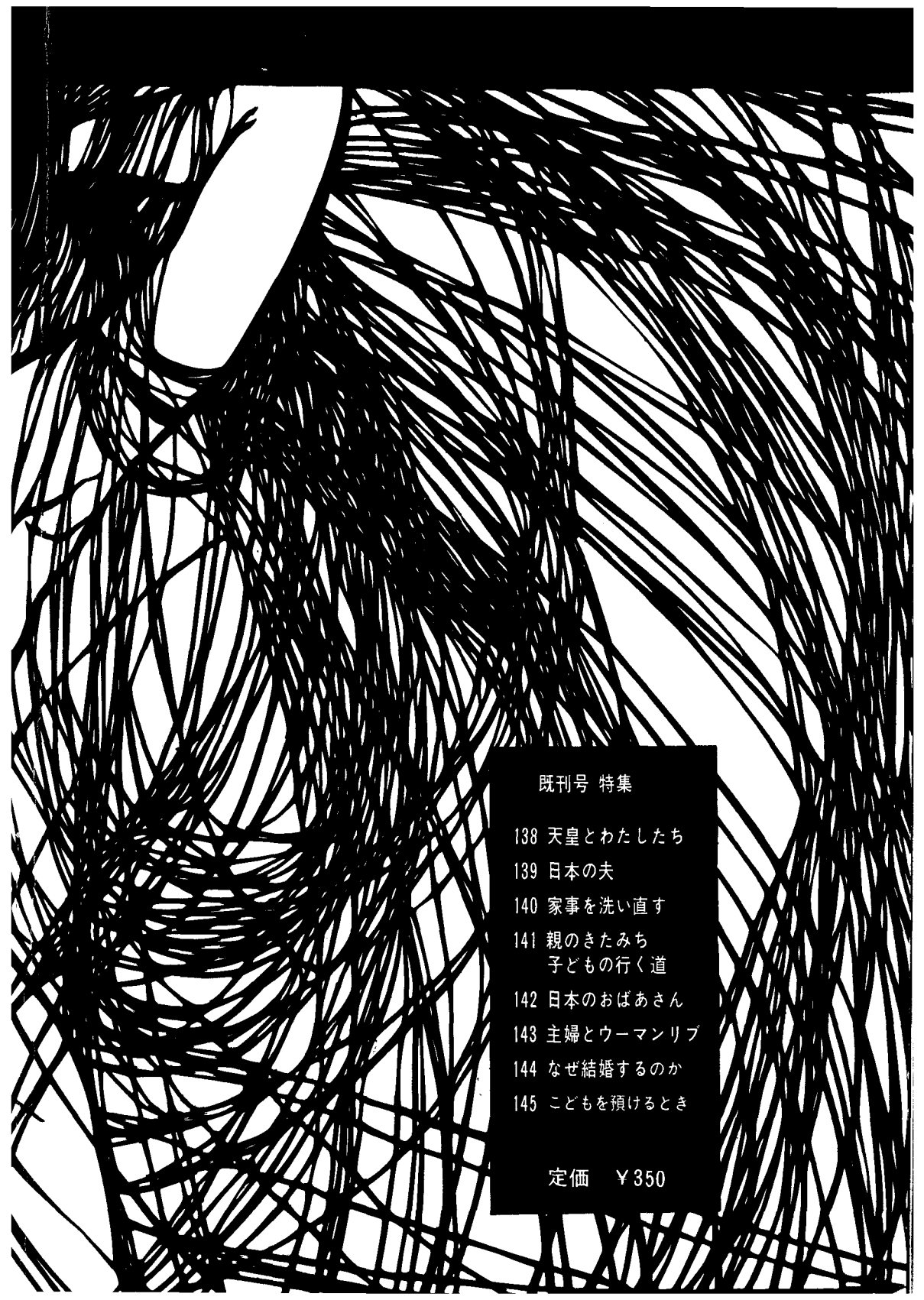
146号編集メンバー

荒木弘子 小倉徳子 鈴木滋子
田中喜美子 内藤のぶ子 二宮やよひ
林 慶子 福田悦子 和田好子

〈わいふ〉 146号 1977年5月25日発行 定価350円・年間予約1500円(隔月刊)送料別

編集・発行・わいふ編集部 〒162 東京都新宿区加賀町2-3 田中喜美子方 ☎ 260-5500
269-2388

印刷・櫛イワタ印刷 TEL (262)1070 ★振替注文は東京5-110430 わいふ編集部へ



既刊号 特集

138 天皇とわたしたち

139 日本の夫

140 家事を洗い直す

141 親のきたみち
子どもの行く道

142 日本のおばあさん

143 主婦とウーマンリブ

144 なぜ結婚するのか

145 こどもを預けるとき

定価 ￥350